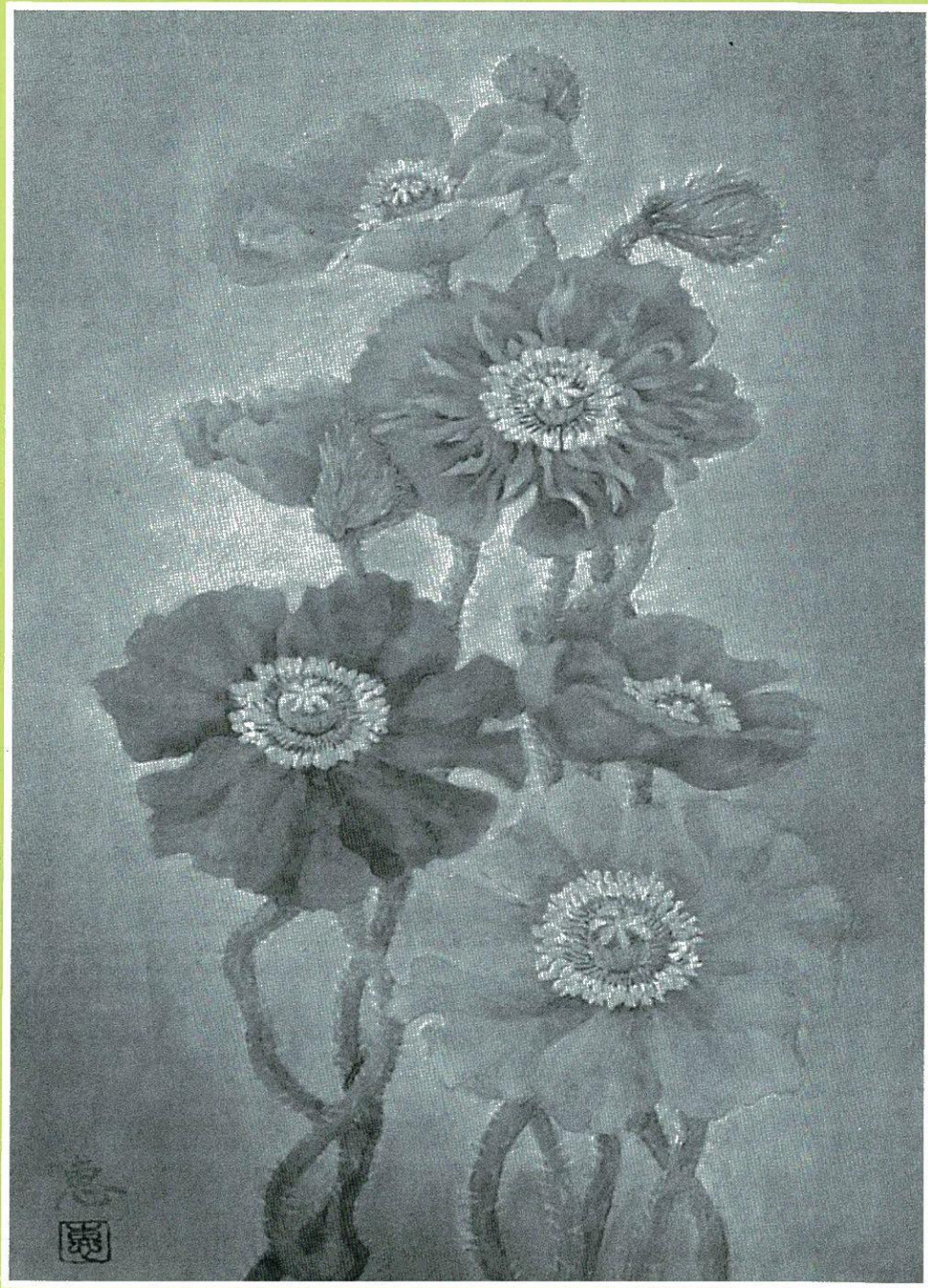
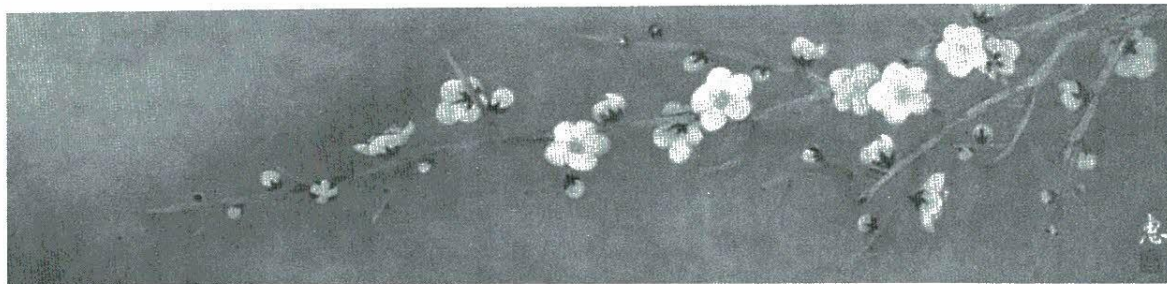


山崎町文化

'03-2*No.22



山崎町文化協会



「やまさき文化」二十二号の発刊に当たって

山崎町文化協会会長 壺 阪 壽

「やまさき文化」の二十二号が発刊されました。この小冊子が発刊するには編集委員の皆様の大変な努力と、そしてそれぞれの分野から寄稿下さったお陰であり厚く感謝申し上げます。

山崎町文化協会を構成している団体は二十一あります。その団体が年間を通じて色々な活動をしているのですが、その活動の内容をこの小冊子に発表していますので、「やまさき文化」を読んでいただければその様子が良く分かります。

それと山崎町出身者で各方面で活動しておられる方からも特別寄稿をいただき大変内容を充実していただいています。

文化活動ということは、一朝にして出来るものではなく根気強く続けてゆかなければなりません。特に山崎の町のように古い伝統のある地域では、いわゆる伝統文化もありますし、また新しい文化も興っています。

そのような状況の中で、やまさきとしての地域文化を創ってゆかなければなりません。

現代の日本は戦後五十余年民主主義国家として進んできました。そして、それと同時に新たな文化国家としての模索も始まりました。しかも、その方向は従来の中央集権型ではなく地方分権型で進んでいます。

私等山崎の文化も地域に根を下ろした活動を続け新しい山崎の文化を創ってゆかなければと考えます。

◇ 目 次 ◇

やまさき文化の発刊に当たって	壺 阪 壽	2
豪者愚直	林 沙鷗	3
正月は故郷で	沢田 寿仁	11
短 歌	稲村 幸子	13
俳 句	芦田 八重	15
会の歩みと百号記念誌	森本 一二	17
山崎植物同好会の活動について	久宗 丑雄	17
春 服	浅田 耕三	18
随陽寺の花の宴	千田 淳平	18
播磨國風土記にある六木郡	小川 登	19
篆 刻	英保 英一	19
踊れるしあわせ	岡田 正子	20
Y・O・Bの活動状況	片山 澄之	20
すばらしいことをみつけよう	萩藤よし子	21
心を写す鏡に	竹添 齋	21
和とふれあいの心で	梅岡 亨栄	22
スポーツ21 囲碁教室	松本 明	22
絵画よもやま	福岡 久藏	23
趣味を生かした花づくり	田口 實	23
やまさき文化によせて	秋田 裕三	24
平和を願って	塚田 美紀	24
秋のふれあい文化祭に参加して	長田 孝	25
和太鼓の音色	久保 孝	25
事務局だより	藤村 清一	26
編集後記	荒木 俊介	26
表紙画／カット／	片山 吉恵	
表紙題字	尾崎 正一	

豪者愚直

山崎文学会 林 沙 鷗

― 遂二江南ノ野水ニ留マラス

高ク飛ブ天地一閑鷗

塙 團右衛門

戦国の世の武士の大かたは、時至れば兵を預かる一かどの武将か、あわよくば一國一城の主を夢見ていた。この詩句は、彼が当時の主君であった伊予城主加藤嘉明と合わず城下を去るに当たって書院の床に黒々と落首したものである。團右衛門は、この詩句を自作自演で生涯を終えた。

稀れにみる巨漢であった。十五才の頃には、既に大人をも凌ぐ巨軀に加えて腕力にかけても誰もかなう者が無かったといわれている。

生まれは、遠州横須賀（愛知県幡豆郡吉良町）とも、あるひは尾州羽栗郡竜泉寺村ともいわれ定かでない。勿論、生年月日に至っては分かる筈もないのだが、ただ、十七才の時信長のお馬番となり、後、士分に取り立てられたところからその時代と年令を推測するしかない。しかし、一升酒を平らげ、酔うと喧嘩沙汰に及ぶので、暇をだされ、秀吉に引き取られた。秀吉は、戦場での彼の豪勇さを惜しんだのだが、これも同様で長くは続かなかつた。そのように云うと、ただの手に負えぬ豪者のように聞こえるが、彼にも救われるところがあつた。それは終生、何時かは采配をふるって多くの軍勢を指揮する侍大将になって見せるといふ夢を持ち続け、傍ら漢詩の素養などにも心掛けていた。また一面、お人よしで愚直なところから浪々の身とはいえ、救いの手をさしのべる友人知己は多く、暮らして窮する様な事はなかつた。

その後、縁あって豊臣秀吉の家臣で、賤ヶ岳の七本槍で有名な松山城主・加藤嘉明に千石で召し抱えられた。一千石といえば、念願であつた一かどの侍大将である。その後起きた慶長の役にも武名を馳せ、一応順調にみえたが、秀吉死後に起きた関ヶ原の戦いで持ち前の気性が災いした。その時、團右衛門は、主、加藤嘉明に従って東軍についていたが、関ヶ原の宿駅近くで初めて西軍と接触した。

九月十五日の明け方のことである。主の嘉明は、前面の敵、島左近と蒲生備中の陣に

対しておびき出し作戦をたて、その役を團右衛門に命じた。これが不運の始まりであつた。挑発しておびき出そうとしたが、押さえのきかぬ豪勇さがわざわざいして敵陣に深く切り込んでしまった。そのうちに両軍入り乱れての戦闘となつたが、結果は幸い東軍の大勝に終わった。

国元に帰つた武士たちの最大の関心は論功行賞である。團右衛門は、ひそかに敵を誘き出すという命令には背いたものの、その結果は一番槍となり、数々の首級を上げた戦功で償って余りありと読んでいた。しかし、その期待は脆くも崩れて何ら恩賞の沙汰はないどころか、腹に据えかねて抗議をすると激怒した嘉明自ら「敵を誘き出せと命じたにも拘わらず、敵陣深く突き進みしは蛮勇のみにて知略なし。侍大将など以つての外、その器にあらず」

と叱られ、怒つた團右衛門は、我が家に帰って筆を取ると頭書の詩をかいで城中の書院の床の間に掲げ、無断で松山城下を去つた。烈火の如く怒つた嘉明は、直ちに追つ手を差し向けたが、とても敵う相手でなく悠々船で四国を離れた。

この事を伝え聞いた芸備七十二万石の小早川家では、早速加藤家同様一千石にて召し抱えたと申し出た。主は、関ヶ原の戦で徳川方に寝返つた小早川秀秋である。しかし、早くから戦国の世に身をおいて幾多の権謀術数を見て来た團右衛門には、そうした事より自分の豪勇さをいち早く加藤家同様一千石で買つてくれた秀秋に比べ、自分を罵倒した嘉明を見返したいという気持ちの方が強かつた。それと他に團右衛門の場合考えねばならぬ事があつた。それは当時大名間に「奉公構え」という或る大名の勘気を蒙つてそのもとを去つ者を他の大名は、召し抱えてはならぬという不文律の申し合わせがあつた。これは、生前の秀吉が武士社会の秩序を保つための一つの方法として考え出したものだが、当然そのことを知つていた團右衛門は小早川秀秋であれば、秀吉の妻高台院の甥で嘉明の主筋にあたる家柄であるし、関ヶ原直後の事でもあり、家康の信頼も絶大なものがあるから嘉明といえども手出しは出来まいと、読んで仕えることにしたのである。案の定、二十才の若気の秀秋は、嘉明からの抗議を

「なにを小癩なッ、孫六如きがこの主筋にあたる秀秋に無礼なことを申すな。構わぬ、捨て置け」

と一蹴した。孫六とは、嘉明の出世前の呼び名である。團右衛門の思惑は、当たつた。旧主嘉明の無念そうな形相が浮かぶよううで團右衛門の胸のつかえも少しは下りた。

秀秋が嘉明からの抗議を一蹴したもう一つの背景には過ぐる関ヶ原の戦いのきっかけとなった上杉討伐に際してそれを主導した家康に尾を振る如く先陣を賜った嘉明らに対する不満があった。もしあの時秀吉子飼いの嘉明らが家康を利するあの様な行動さえなければ関ヶ原の一戦も無く、今自分を苛んでる寝返りと云う世間の悪評にこれ程苦しむこともないのではという嘉明らに対する苛立たしさもあった。そうした論理にでもその懊悩のはけ口を求めねばならぬほど秀秋の気持ちは切羽詰まったものになりつつあった。

忘れる為の酒量も次第に多くなり、飲めば飲むほど却って苦しさは増した。それから一年余り程の後秀秋は、この世を去った。僅か二十二才の若さであった。一部には毒殺ではないかという噂も立った程である。嫡子が無かったため小早川家は、断絶となり、同時に团右衛門は岡山城下を去らねばならなくなった。团右衛門がこの平穩がそのまま続いてくれればと願っていた暮らしもあえなく終りを告げた。またまた浪々の身かと、身の不運を嘆いたが、幸いなことに豪勇の士を重んずることでは有名な福島政則はそのことを知ると直ちに仕官を勧めて来た。渡りに舟であった。禄高も小早川家同様一千石である。嘉明が小早川家に申し入れた“奉公構え”の抗議も無視されて既に三年が過ぎている。团右衛門も福島正則もよもやと思っていたのだが嘉明は、諦めていなかった。今度は、曾ての同僚である。

「昔は昔、手放さなければ、たとえお主であろうと一戦をも辞せず」といって強硬な返事にさすがの正則も困惑の末、嘉明の申し入れを受け入れざるを得なかった。

团右衛門は、つくづく仕官の難しさを知った。秀吉恩顧の大名では殆ど加藤嘉明の介入があるに違いないし、かといって侍大将を目指すからには一千石以下で自分を安く売ることが团右衛門の矜持が許さなかった。友人知己を頼って遠くは関東迄もの浪々の末、旅中で知り合った後藤又兵衛の勧めで京の五山の一つ妙心寺を訪ね、暫くは住職大竜和尚の世話になることにした。又兵衛もまた团右衛門同様主君である小倉藩主黒田長政と意見が合わず、陪臣ながら一万六千石の禄を捨て一族郎党とともに親交のあった豊前藩主細川忠興のもとに身を寄せ忠興も又兵衛を厚く遇したが、これを知った長政は、激怒して又兵衛を手放さねば、一戦をも辞せずと細川家に厳しく申し入れたため両家の険悪な空気を憂慮した幕府が仲介に入り、結果又兵衛は、細川家を去って浪々の身となった

いたのである。だから又兵衛は团右衛門の苦境をよく理解していて、早くから親交のあった妙心寺の大竜和尚のもとに暫くは身を寄せる様团右衛門に勧めたのである。初めて妙心寺を訪れて、後藤又兵衛の名を出すと前に座した团右衛門の風体を上から下へと一瞥して早くも来意を察しているようであった。瘦身で温和そうな風貌ながら禅僧特有の鋭い眼光を備えている。

「そなたも後藤様同様“奉公構え”とやらに苦勞なされている様子、よくよく主運のないお方じゃ。身の振り方がつくまで当寺にいなさるがよい」

ただし、近頃の徳川、豊臣両家の間の険悪な空気の折柄、豊臣家の浪人召し抱えという不穏な動きに対する京都所司代の取り締まりが厳しくなっているので、一雲水となって修行に励んでもらいたいということであった。もとよりそれは覚悟の上で、その翌日、早速役僧の手によって断髪が行われ黒染の衣が与えられた。巨体と戦場で鍛えた風貌で荒法師の印象は拭えない。これをつくづく眺めていた大竜和尚が

「はほう、これで立派な雲水じゃ。そうじゃ、名前は鉄牛と致そう。どうじゃな、团右衛門殿」

雲水らしからぬ名前だが、如何にも团右衛門に相応しい猛々しい名前である。そこには大竜和尚のこの俣では終わらせたくないという意図がくみ取れて团右衛門は胸に熱いものを覚えた。

その翌日から厳しい雲水としての修業が始まった。

朝は早暁と共に起床、水汲み、拭き掃除、炊事、洗濯、座禅、読経と休む暇もない有り様である。この一通りの修業を終えてから托鉢が許されるのである。お経を唱えられない雲水では托鉢が務まらないからである。ところがそのお経が苦手なのである。一カ月程の修業では無理もないのだが、そのため托鉢に廻る雲水としての評判は余りよくなかった。しかし、街中で苛められている子供などを見かけると庇ってやったり、町衆の者が、当時“傾き者”と称される無頼の徒に言い掛かりを付けられて難渋しているのに出くわすと仲裁に入って苦もなく“傾き者”を退散させるといった話が伝わると、次第に頼りになる雲水という評判の方が高くなり始める始末である。

しかし、それも暫くの間で、まもなく起きたのが方広寺の鐘銘事件である。

秀吉は生前京都東山の地に豊臣家の子孫繁栄を願って方広寺という壮大な寺院と大仏殿を建立した。ところが、慶長元年七月の大地震であえなく崩壊してしまったが、たまたま朝鮮出兵の最中でもあり、そのままになっていたものを淀君母子が、亡くなった秀

吉の供養のためにと莫大な費用を傾けて再建したのである。又、同時にその堂宇に相応しい梵鐘をと云うことで重さ一万九千貫、口径九尺三寸、高さ一丈四尺という巨鐘を鑄造して、落慶と共に大仏の開眼供養を行うことになった。一方同じころ、予て二条城で謁見した秀頼の立派な成長ぶりを見て将来に禍根を残すのではという深刻な危惧を覚えていた家康はその鐘銘に関東不吉の字句ありと難癖をつけた。これを機に両家の関係は、一気に険悪化した。やがて、両家手切れの噂が巷に流れると大阪城には諸国に溢れていた浪人がぞくぞくと集まって来た。この噂を耳にした团右衛門は、じりじりとした気持ちになつて来たが、とうとう辛抱出来ず大竜和尚の僧坊を訪れて、豊臣方に参陣すべく大阪城行きの決意を述べた。

「ではいよいよ出て行きなされるか。最早戦さは必定じや。だが、豊臣方には万が一にも勝ち目はありませんぞ」

自分の戦功を認めず、「奉公構い」をたてに半生を苦しめ、関ヶ原以来太閤殿下の恩顧も忘れて徳川方に媚びへつろうて来た加藤嘉明と同じ陣営に属したくないという意地もあった。

「勝敗は時の運、それがしの生涯の望みは采配をとって一軍を差配する武将でござった。豊臣方であれば間違いなくその望みは叶えられ申す。場所も今は亡き太閤殿下の大阪城とあればこれ以上の舞台はござらぬ」

「そこまで覚悟が出来ているなら止めはせぬ。だが、今はもう所司代が目が厳しくなっている。捕まったら侍大将どころか元も子も無くなってしまう。後の事は、このわしに任せよ」

数日後、和尚の計らいで有力な檀家の商人俵屋の世話で堺に商用に出向く手代らと共に京都を脱出することになった。申の刻に俵屋に入り、夜を待って俵屋の荷駄馬の一隊に紛れて京都を脱出するのである。ところが团右衛門はその時刻懇意になつた者達との挨拶や身の回りの整理などに気をとられ、気がつくとき約束の時刻がとくに過ぎていた。急いで大竜和尚らの待っている俵屋に向かった。

一方、大竜和尚が待っている俵屋では主ともども、じりじりした思いで待ちあぐんでいた。そこへ团右衛門が慌てふためいてやってきた。約束の時刻をもう半刻も過ぎていた。大竜和尚は、团右衛門の顔を見るなり

「あれ程早く申しておいたに、半刻余りも遅れてどうしておったのじゃ」
と大竜和尚は、語気も荒々らしく叱りつけた。团右衛門も

「遅れて誠に申し訳ない」

としきりに謝っていたが、そのうちに主に向って誠に申し訳ないが筆と料紙を拝借致したいと所望した。不審げに聞いていた主が思い直した様にして女中に言い付けて筆と料紙を持ってこさせると

「かたじけない」

とそれを受け取って、一寸と思案をしてから徐に筆に墨を含ませたかと思うといぶかし気に眺める二人の前で料紙にさらさらと何やら書き終えて、それを大竜和尚に手渡した。

不満げな和尚が手渡されたその料紙に目を通した。と、その中に今まで苦虫を噛んだような表情の顔が次第に緩み始めたかと思うと、やがて忽ち哄笑に変わっていった。次にそれを受け取った主が

「どれどれ」

と、読み上げた。

「一鞭、遅れ到るも、敢えて怒る事なかれ。」

君は大竜に罵り、我は鉄牛――

この機転のきいた軽妙な詩句に一座は一度に和やかになった。

「いやあ、恐れ入りました。この様な立派な詩句を当意即妙に詠まれるとは。益々鉄牛様が気に入りました」
と後はささやかな別れの宴になった。唯の愚直者ではなかった様である。

この様にして团右衛門は、大竜和尚と俵屋の主の協力で無事大阪城に入城出来た。大阪城内では既に各所に仮宿泊所や陣所が設けられ、割り当てられた将兵達が陣地の構築などに忙しげに立ち働いて決戦前の慌ただしい空気が漲っていた。大阪城は、元は織田信長も攻めあぐんだ石山本願寺の跡に建てられた城だけに幾多の川や水路に囲まれた天然の要害であった。北は淀川、東は平野川と猫間川、西は淀川と木津川が合流して複雑な水路を形成している湿地で守るに適しているが、僅かに南の方面だけは平地で徳川方の主力はこの南側に陣地を構えた。前線には西から伊達政宗、藤堂高虎、松平忠直、井伊直孝、榊原康勝、前田利常といった大名が陣地を構え、その後方の茶臼山には家康、その東の岡山には秀忠と云う堂々たる布陣である。

そこで大阪方では城の南に急遽玉造から生玉にかけて空堀を掘って底に刀や槍の先を

立てるなどして守りを固めた。ところがその前面の平野口と小橋村の間に三方を崖に囲まれた小高い丘があって此処を敵に取られては空堀の威力が半減すると真田幸村と後藤又兵衛の二人が主張して砦の持ち場争いが始まった事は有名である。初め幸村は兄の真田信幸が徳川方に属して、しかも家康のお気に入りだけに幸村にその砦を任せるといずれば徳川方に寝返る恐れありとして不利であったが、最後はその誠意が認められて幸村に任される事になった。これが有名な真田丸である。この様にして戦機は、まさに熟しつつあった。

城の西側の守りは複雑な水路や湿地帯に恵まれ要害の地と云うことが却って禍して船場、土佐座、阿波座地区の前面に設けられた博労淵と穢多崎の二つの砦は蜂須賀至鎮の手勢であえなく落とされてしまった。そこでこの西方の戦線は手勢の手薄なこともあり、戦線を横堀川まで後退させて守りを固める事にした。この勝報が徳川方に伝わると本陣前面の主将の間にも目の前に横たわる目障りな真田丸と名乗る砦も一気に揉み潰してしまえと云う気運が俄に起きた。先陣の功を先取りされたという焦りと豊臣方組し易しという気持ちからである。そこでその前面に布陣していた前田利常の陣営では早速夜を待つて攻略にかかることにした。焦ったのである。ところが、前田勢は真田幸村の巧みな誘導作戦にはまって、夜が明け始めた頃真田出丸の下まで達したと思われる頃突然頭上から真田勢の一斉射撃が始まった。油断していたのである。逃げるに逃げられず堀に張り付いた兵には上から大石が落ちて来るといった状況で部将までが重傷を負う始末、それを見て応援に駆けつけた部隊にも更に激しい銃撃が加えられ苦戦に陥ってしまった。

これを見ていた井伊直孝と松平忠直の軍勢も遅れじと進撃を開始したが、これも空堀の前まで来たところを木村重成の軍勢の猛反撃を受け、大打撃を蒙ってその損害は余りにも大きかった。

戦いはこの様に一進一退のまま小康状態になったが圧倒的な戦力を誇る徳川方は、焦る事なく新たに穴を城の下まで掘り進める作戦を立てたが、これは失敗で、家康は、その裏で徒に犠牲を出すことを避けるため淀君の叔父に当たる織田有楽斎を通じて和睦に持ち込む様働き掛けていた。城内では和戦両派に意見が分かれた。大野治長の弟治房の指揮下で船場方面の陣地にいた団右衛門はその話を聞いて

「情けなや、何んという事」

まだ戦らしい戦もせぬうちに早くも和睦の話である。何か一合戦せねばと思立った団右衛門は、前面の蜂須賀勢の陣に夜襲を仕掛ける計画を大野治房に申し出た。当初は治

房も余り乗り気ではなかったが団右衛門の懸命の説得の結果百五十人ばかりの兵が与えられた。ところが、そこに岡部大学という剛の者が同じ策を申し出たため紛糾した。最後は治房の説得でしこりは残ったものの岡部大学が辞退して団右衛門は、早速その準備に掛かった。しかしこの事が後に禍の種になるのである。

団右衛門は綿密な計画のもとに十二月十六日の夜亥の刻を期して出発した。同士討ちを避けるため肩に白布を付けさせ、合言葉も用意した。予て用意して置いた筈を物音をさせない様にと橋の上に敷いて行く。総てが隠密裏である。

結果、夜襲は見事に成功した。蜂須賀勢の敵の陣営では博労淵、穢多崎の戦いでこの方面の大阪方の戦力を甘く見ていたのと和睦近しとみて気が緩み具足を解いて寝込んでいたところを襲われたため慌てふためいて逃げ出す者やら健気に素手で立ち向かって来る者など大混乱に陥り、遂には守将の中村右近重勝までが討ち死するという大損害を蒙って総崩れとなった。この騒ぎに気付いた隣の陣営の稲田修理示植が急いで救援に駆けつけたがこれも忽ち総崩れとなり守将の稲田修理も槍疵を受けて後退せざるを得なくなるといった状態でその間に夜襲部隊は悠々と引き上げた。

その翌日蜂須賀方の陣地の近くに「夜討ちの大將塙団右衛門直之」と書かれた木札が数箇所にわたってばらまかれていた。団右衛門ならではといった小憎らしい仕業に蜂須賀勢は歯軋りすると同時に団右衛門の名は敵味方の間に一気に高まった。

徳川方は穴掘り作戦による和睦交渉が失敗に終わると老獪な家康は、次は予てから準備を整えていた外国製の太筒（大砲）を城の天守閣めがけて打ち込む作戦に切り替えた。この作戦は見事にあたり、打ち込まれた弾丸の一発がたまたま淀君の御座所近くの柱に命中し、轟音と共に折れ、傍らにいた二人の奥女中が押し潰されるという事態が起こり、さすがにこれを見た淀君も顔面蒼白となって俄に和睦に傾いていった。

この和睦は、豊臣方からは京極高次の未亡人で淀君の妹である常高院と大蔵の局、徳川方からは、阿茶の局と本多正純が城と茶臼山の中間の地で会見して行なわれた。種々協議が行われた結果互いに誓書を取り交わしたが、不思議なことに堀の埋め立てについては誓書の中には無く、ただ、その後の大野治長と本多正純との口頭のみ内約でも戦の直前に掘られた空堀と三の丸の外堀は徳川方の手で埋めるが二の丸の内堀は豊臣方の手で埋めるということであった。

講和の整ったのが慶長十九年十二月二十一日でその頃には徳川方では既に諸大名の埋

立工事の各受け持ち現場から工事奉行、更に数方に及ぶ人夫まで用意を整え、二十四日には早くも埋め立て工事が始まり、あっという間に外堀を埋めてしまうと、休む間もなく内堀の埋め立てまで始めた。

驚いた大野治長が本多正純のもとへ使者を送ると正純は現場に現れ

「それはひどい。即刻中止させよう」

と誠意ありげな態度を見せるのだが一向に工事を止める気配はなく怒った淀君は侍女のお玉の局を現場に差し向けたが、埒があかず、こうして交渉に手間取るうちに予てからの計画通り徳川方の手で内堀まで埋められてしまった。

ここにきて初めて淀君も治長も家康に謀られた事を知った。この内堀埋め立ての顛末が城中に広まるとそれ見たことかと主戦派が勢いを盛り返し、淀君をはじめ当の治長自身らもその屈辱の前に再戦止むなしという大勢に傾き始めた。

この動きは京都所司代板倉勝重によって内偵され、逐一駿府の家康もとへ報告されていた。慶長二十年三月十二日遂に待っていた大阪方再挙の報を受けると家康は、大阪方には、先に取り交わした誓約を何一つ履行しようとする誠意が認められないとし、再び全国の諸大名に出陣命令を発した。ただしこの度の戦いは、裸城攻め故手勢は昨年冬の陣の半分が良いとし、自身も十八日には早くも京都二条城に到着して本拠を構え諸国の軍勢の集まるのを待った。

大阪方でもその後軍議を重ねるのだが、裸城となった今ではこれといった妙策はなかった。ただ助勢を頼んだ大名のうち紀州和歌山城主浅野長辰だけは秀吉との縁も特別深く大阪城とは目と鼻の先ということで再三にわたって味方につくよう使者を送ったのだが容れられなかった。そこで、それでは先ず緒戦で和歌山城を攻め落とせば諸国の大名の間にも動揺をきたすであろうということで長野治房を総大将として三千の兵をもって和歌山城を奇襲すると云うことに決し、急遽軍勢を整えて四月二十八日に大阪を出発することにした。

团右衛門は、当然先鋒隊を申し出たが、ここに来て再び岡部大学が先の夜討ちの際は譲ったがこの度は我々と同じく先鋒隊を申し出たのである。困じ果てた治房は、次善の策としてやむを得ず二つの先鋒隊をそれぞれに編成して出発させた。しかし、このことが团右衛門に取って禍根の種となった。

先鋒隊に続いて治房の三千の本隊も奇襲を成功させるため強行軍で南下した。

ところが奇しくも同じ日和歌山の浅野勢も家康からの再三の要請で止む無く大阪に向

けて出発していた。浅野家としても大阪城を攻めるのは心苦しかったのである。こうして北上を開始した浅野勢が佐野まで来た時物見の兵が帰ってきて二万の大阪方の軍勢が南下していると報告した。戦場心理で三千の兵を二万と見誤ったのである。驚いた浅野勢は、軍議を開いて、宿老亀田大隅の策を容れ、防御的な地形に恵まれぬこの佐野は一旦放棄して樫井まで退き、信達の山に本陣を据え、樫井川を前にして八町縄手の堤に伏兵をおいて戦うことにした。丁度その頃团右衛門と岡部の先鋒隊が佐野に到着してそのことを知ると团右衛門は

「岡部殿、浅野勢は、既に我々の動きを察知したとみるべきでござろう。さすれば我々はこの事を本隊に知らせ返事のあるまで此処で待つことにしようではござらぬか」と、相談を持ちかけた。ところが岡部は

「塙殿には臆病風にふかれたと見える。敵が退却をしたとなれば好機でござる。時を移さず一刻も早く追跡せねばならぬ。嫌だといわれるなら、それがし一人でも参る。者共続け、それでは御免」

とばかりに馬に鞭打って駆け出した。团右衛門も持ち前の気性から先を越されてはと跡に続いた。これが团右衛門の命取りとなった。樫井には八町縄手の堤にさしかかった時朝霧の中から突然

「バン、バン……」

という激しい銃声と共に先を行く兵がバタバタと倒れた。

「敵襲だあ」

慌てて逃げようとする兵を押し止め銃声の止んだ頃をみて

「それッ、今だッ。進めッ」

と怯む兵を励まして敵陣の側面めがけて突き進んだ。しかし团右衛門らの先鋒隊が本隊から遊離した寡兵であることを物見の報告で知っている敵は反撃を開始、ここに双方入り乱れての戦いとなった。その中に

「岡部様手傷を負われ、後退されました」

と、岡部隊の兵が告げに来た。敵は、後方の応援を得て笠に掛かって攻めて来た。

「何ッ、後退したとな。それなれば岡部隊の兵は皆わしの隊に合流しろ。一步たりとも退くでないぞ。この团右衛門がいる限り必ず敵を突き崩してみせるッ」

大阪城入城以来既に死は覚悟の上である。ここを死に場所と決めた团右衛門は、敵陣目指して突き進んだ。しかし、四十九才の体、次第に疲労が重なるうち、敵の田子助

左衛門なる武士が放った矢が団右衛門の高股に深く突き刺さった。堪らず落馬したが、氣力を振り絞って立ち上がるや田子助左衛門に駆け寄って刀で渡り合う間に田子助左衛門危やうしと見た同僚の八木新左衛門が横あいから繰り出す得意の槍の切っ先を脇腹にうけ、堪らず近くの農家の壁にもたれる様にして息絶えた。その日の戦いは、逃げ帰った岡部大学らを除いて殲滅的な敗北を喫し、後方でその報せを聞いた大野治房は、肩を落とし軍勢を引き連れて大阪に引き上げた。

亀田大隅の建策で大勝を得た浅野長辰は、その戦勝を家康に報告した。その日家康は、京都を發し里田に本陣を構えていたが、それを聞いて緒戦の大勝を幸先良しとして早速浅野長辰に褒賞を与えた。

ところがその夜変事が起きた。

その日浅野長辰から送られてきた首を前に本多佐渡守正信は、明日からはいよいよ本格的な最後の大阪城攻めが始まる時に気苦労も多いであろう大御所を煩わしてまで首実検を行うべきかどうか迷っていた。そこで正信は家康に伺いをたてた。

「如何いたしたらよろしいものやら、いっそ取りやめに致したら良いかとも思いますが」
正信は、曾て三河時代家康が一向一揆に悩まされた時考えるところあって家康のもとを去って諸国を浪々の旅に出た。それから再び帰参を願ひ出て許された時は、既に十九年の歳月が流れていた。その間流浪の旅の辛酸は、正信を諸国の情勢にも通じ人間的にも深味のある一人の武將に成長させていた。以来、武辺一辺倒の武將の多い家臣の中で次第に重用され、今では家康にとって正信の存在は無くしてはならぬものになっていた。

正信は家康の顔を見ただけで今何を求めているかを見抜いたし、家康も正信の意見には耳を傾けた。今正信から首実検の相談を受けると、いつもの様に

「ではその様にいたそう」
と答えて事をすませた。

その夜半のことである。井伊直孝の陣所の近くが、俄に騒がしくなった。何処から紛れ込んだか一人の女があられもない姿になって何事かを半狂乱の様にならわめて番卒らも手がつけられない状態になっているのである。俗にいう憑き物が移った状態である。直孝は騒ぎに目覚めて不審に思い、外に出てみると当の女は、直孝を見ると主将と思つたらしく一層大きな声でわめき始めた。初めは分からなかったがよく聞いていると

「我は、大阪方でも名ある部將の一人塙団右衛門直之なるぞ。この度甲斐無くも討死

せしが、首実検の一つ無きやに聞き及んだ。無念なり。もしこの俣に捨て置くならば未
来永劫に祟つてみせようぞ」

と叫んでいる様なのである。髪は乱れ着物は肌も露に着崩れている。戦場経験の浅い直孝は戦のことならいざ知らずこの様な事は、初めてである。そのうちに騒ぎに目覚めて不審に思っていた家康は、側近からの報告でそのことを知り、直ちに直孝に会って話を聞いた。

「そうであったか、団右衛門といえは先の冬の陣に夜討ちの大將として蜂須賀が陣に討ち入りし者で、昔、加藤嘉明が手の者であったが、『奉公構い』となったときいている。それでは佐渡を呼んで首実検の用意を致させよ」

長年にわたって数多くの戦場経験を重ねて来た家康はこともなげに直孝に命じた。夜半の事でもあり、明日からの戦さも考えて竹矢来も幔幕も用意せず、唯団右衛門の首だけは髪を梳き薄化粧を施して、型通りの儀式をおえた。居並んだ側近たちがそれぞれの陣屋に帰るとき家康は、直孝に女が逃げぬ様監視し明朝その後の様子を調べて知らせよう命じた。中には敵のまわし者もいるからである。直孝が陣屋に帰って様子を見ると女は丸で何事もなかったかの様な顔ですやすやと眠っていた。

翌朝直孝は、女を呼んで直々に取り調べた。初めのうちは執拗に黙秘をつずけていたが、最後に女が錯乱状態になっていた時に落としたものを番卒が拾っていたという「武運長久 塙団右衛門直之様」と書かれた護摩札を取り出して

「これをよく見よ。これでも未だ知らぬというのか」

詰め寄ると観念したのか、女はがっくりと肩を落として語り始めた。

「恐れ入りました。こんなことを申し上げましたなら身の恥を晒すようで黙っていましたが、もうこうなつたからには何もかも申し上げます」

女は、もと拘摸であった。若い頃は親が実入りが良いというので茶屋の給仕女をしてきたが、少しばかり器量が良いのと愛想の良さが災いして男に身をもち崩し、その果てに悪い仲間誘われて拘摸になった。その頃の女の家は、父親が病勝ちのため一家を支える働き者の母親は無理が祟つたのか父親より早く亡くなった。父親も気落ちしたかの様にそれを機に全く床に臥してしまふ有様で、娘が拘摸で稼いでいるという事は、うすうす知っていたが一家のくらしが掛かっているだけに意見がましいことをいう氣力も無かつた。もともと素早い質で仲間からは「燕のお辰」と異名で呼ばれる程であつたが、

所詮は女掏摸、病身の父親を抱えての暮らしは惨めなものであった。

そうしたある日淀舟で一働きしようと大阪から伏見に上る舟に乗った時、目を付けたのが团右衛門であった。一見大柄で恐そうな顔だがよく見るとお人良しで隙だらけに思われたからである。さて舟が伏見に着いて客が舟縁に寄っていいよいよ下りようとする混雑に紛れてお辰は、難無く团右衛門から財布を掏ると何食わぬ顔で陸に上がって素早くその場を逃れようとした時 後ろから

「その姉さん一寸待ちな」

という男の声が追って来た。——しまった——逃げようと思った時は遅く右の利き腕を何者かにしっかりと押さえられていた。舟の艦にいた屈強な船頭であった。一瞬間から血の気がすーっと引いて行った。強い力で利き腕を押さえられているため身動きも出来なかった。それからその船頭は、傍らを通り過ぎて行こうとする团右衛門に

「おっと、お侍さん気を付けなさいませぬ。懐の物をお調べなさいませぬ」といわれて振り向いても

「今何といわれた。拙者のことかな」

と、至極鷹揚にまだ気が付かない様子に当の船頭は、一寸まどろしげな表情になって「いや、ね。こういう処は手癖の悪い奴が多いから女だからといって気を許しちゃいけません。今一度懐の物をお調べなさいませぬ」

と、いわれて初めて懐に手を入れて財布の無くなっているのに気づいたが、屈強な男に利き腕をしっかりと押さえられているお辰の姿に目をやってから、ふと哀れに思ったのか二人を近くの物置小屋の陰に連れて行くと

「これ船頭、先ずその手を放してやりなされ。痛そうにしているではないか」と不足げな顔の船頭の手からお辰を解き放つと徐に話し始めた。

「この財布は、拙者の物ではない、この女の物だといってもそなたは承知すまい。確かにこの女が掏るところを見ていたんだからな。だがなあ船頭、拙者も今はこの様に見える影もない浪人だが、昔は一かどの禄をはむ武士であった。ところが恥じを申す様だが、ふとしたことがもとで浪々の身となってしまった。以来運にも恵まれず、様々な苦勞を重ねて諸国を渡り歩いたが未だにこの通りの浪人者、諦めてそろそろ娑婆に見切りを付けて仏門に入って今一度己れを見つめ直して見ようと知人を介してこれから京のさる寺に向かうところだ。明日からは最早お金には縁のない身、見ればその女も暮らして困っている様子、船頭には申し訳ないが、いっそ、その金をこの女に授けようと思う。見れ

ば女もよく暮らして困っているの上の盗みであらうからのう」

それを聞いて相変わらず不足気な顔で、もじもじとしている船頭に

「おお、そうであった。そなたにもお礼のしるしに些少だがこれを取っておいてくれ」と、財布の中から一朱銀を取り出して船頭に差し出すと船頭は

「いやあ、あつしはそんな積もりでいったんじゃありませんや。そんなお金は……」

と言いながらも嬉しそうに受け取るとお辰に向かって急に愛想よくなつて

「それじゃ姉さんもこれを機にこんなあこぎな真似からはきれいさっぱりと縁を切って、まっとうに生きて行きなさいませぬ」

と言いつつ残して去って行った。

「地獄で仏とはこの事でした。それにしてもそのお金だけは受け取れませぬとご辞退を申し上げたのですが、武士が一度口に出したからには今さら後には引けぬの一点ばりで押し通されて受け取る事になりました。そこで、それではお名前だけでもいいから積もりで与えたのではないといわれます。それではこれから行かれるお寺の名なりともいいますと修行の身故来られても困るといわれます。それでは受け取ることは出来ませぬといえますとそれではとその時やと塙团右衛門直之と名乗られ、これからは堅気になって達者で暮らせよといわれて去って行かれました。以来私は、きっぱりと掏摸の道とは縁を切って昔し慣れた茶屋の給仕女として堅気に暮らして参りましたが、相変わらず病気の父親の世話を見ながらの暮らしは苦しいものでした。しかし、その父親もそれから一年程たった頃とうとう亡くなり、あと僅かばかり残っていた塙様から戴いたお金で何んとか人様から笑われないだけの葬式を出すことが出来ました。それにしても何時も心にあるのは一度は团右衛門に会ってお礼をいわなければという事でした。それには手ぶらでは行けず、なにがしかのお金を用意せねばなりません。私は、懸命に働いて一日も早く塙様にお会いしてお礼のいえる日を楽しみにしておりましたところこの度の戦いで大阪城に向かわれたということが出来ぬ中にこの陣屋に紛れ込み、たまたま雑仕女達の立ち話で塙様が紀州に向かわれ浅野勢との戦いで討死をされ、首は塩漬けにされて送られてきたが、首実検は取り止めになったと聞き、これでは塙様の霊が浮かばれぬと思ひ、せめてものご恩返しにとあの様な端無いことをいたしました」

お辰の話聞き終えた直孝は、その真情のこもった話し方からとても敵方の回し者の作り話とは思えず、一応身柄を番卒に預け、家康に報告のため本陣に向かった。

初夏の夜明けは早い。卯の刻（午前六時）過ぎに本陣を訪ねると家康は既に起きていた。直孝の顔を見ると頗る機嫌良く

「おお、直孝か、あの女の様子はどうであった」

と近くへ呼びよせた。

「ははッ、昨夜帰って見ましたところ丸で他人事の様にぐっすり寝ておりました故そのままにして今朝になってそれがし直々に取り調べましたところ城方の回し者ではなきものと存じます」

と、先程までの取り調べの様子を話した。直孝の話の顔を頷く様にして聞き終えた家康は「大方その様なことではないかと思っていたが、それにしても近頃はない良い話を聞かせてもらった。加藤嘉明などからは団右衛門めは無類の愚直者と聞かされていたが、死に様といい、どうして立派な男よ。ところでそのお辰とかいう女最早心残りはなからう。物など与え、案内の者を付けて怪我なきよう遠くへ立ち去らす様にいたせ」

「はッ、承知しました」

直孝が出て行くのと入れ違いに側近の一人が本多正信の来たことを告げた。飽くまでも主従の礼儀は堅い。正信の姿を見ると

「佐渡か、朝早くから何用じゃ。丁度良いところへ参った。先程まで直孝が参って昨夜の女の事で話して帰ったところじゃ。そちにも聞かそう」

と傍らの床几に招いて先程の直孝の話のあらかたを聞かせた。

「良い話ではないか。のう佐渡、団右衛門も旧主の嘉明からは愚直な男と聞きおったが、なかなか隅にもおけぬ艶福者だわい」

相手が気心の知れた正信となると口のききかたもくだけてくる。

「誠にその様で、愚直者どころか今時珍しい立派な死に様にございます」

「佐渡もそう思うか」

家康も深く頷いた。

今時珍しいといったのはこの度の大阪攻めに太閤恩顧の多くの諸将が先を争って徳川方に参陣していることを指しているのである。今朝早く家康のもとを訪れたのも、この度の大阪攻めから初めて参陣を許された当の加藤嘉明と黒田長政の持ち場についての相談であった。

関ヶ原の戦い以来、家康と正信を最も悩まして来たのは、太閤恩顧の諸将の去就につ

いてであった。関ヶ原の時は戦う相手が三成であったから、それなりの理由が立ったが

昨年暮れの冬の陣からは相手が豊臣家である。それを配慮して存命中の太閤恩顧の福島正則、加藤嘉明、黒田長政の三名はそれぞれの江戸屋敷に足止めを命じて出陣を控えさせた。万が一の寝返りも考慮してである。しかし、この度の夏の陣では特に関係の深い福島正則は差し置いて加藤嘉明と黒田長政の二名は参陣を許したのである。ただし手勢は僅かということにした。今となつては家康の思いの尽である。この知らせを聞いた加藤嘉明と黒田長政の二人は欣喜雀躍、他のどの大名よりも逸早く京都二条城の家康の前に伺候して参陣の挨拶をした。江戸の屋敷に引き続き足止めを命ぜられた福島正則のことを思うと手勢の多寡などは問題でない。曾ての豊太閤の恩顧も昔は昔、今は今、ただ一途に自家の社稷しやくの安泰こそ大事なのである。暫くの沈黙の後

「ところで殿、今朝お伺い致しました儀は、その加藤殿と黒田殿から未だ決まっておりますぬ持ち場を賜りたき旨昨日来使いの者を参らせて伺っておりますが、如何様にしたもので」

と正信がきりだした。

「そうだのう……」

忘れていた訳ではないが、もとより二人の手勢を当てに参陣を許したのではなく先を見てのことなので、つい疎かになっていたのである。家康の表情を見て正信はいった

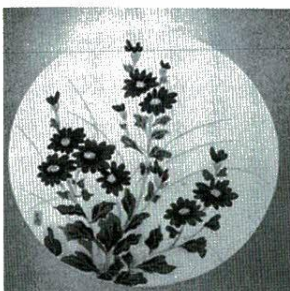
「追って沙汰のあるまで待てと伝えておきましょうか」

「それが良からう。その様に申し伝えよ」

家康は七十四、正信は七十八、正信帰参以来三十三年の間形に影の寄り添うように生きて来た二人の老人は互いの思いを確かめ合うように頷きあった。

「それではその様に申し伝えておきます」

それから数日後、正確には慶長二十年五月八日、僅か二日の攻防で大阪城は、あえなく落城、三日三晩燃え続けた炎は、夜空に映えて遠く京の都からも眺められたと伝えられている。



正月は故郷で

虎の門病院消化器外科部長

沢田 寿仁

(山崎町庄能出身)

私は東京の正月を知らない。

神戸大学医学部を卒業後、直ちに東京に出て二十七年が過ぎた私である。

港区虎ノ門にある虎の門病院に就職して二十七年がたった外科医である私である。

世間では、「お医者様で大変ですね」とか「外科医は手術中は立ちっぱなしで大変ですね」とか、「夜も日曜日もなく大変ですね」とか決まり切ったことを言う。確かに「手術は立ちっぱなし」であり、「緊急手術を夜中でも日曜日でもする」こともあるが、正月に故郷に帰れないほど「大変」な商売でもない。

「お医者様で大変ですね」——この言葉が私は大嫌いである。同僚の結婚式に呼ばれ、仲人が上司の医者の場合、必ず「外科医とは日夜分かたず：云々」と如何にも大変な仕事であるかのような挨拶がある。しかし、この様な挨拶は私には余り歓迎出来ない。私から言わせれば、外科医の仕事は大抵九時五時で終わるのである。下手な外科医は夜までやる。それだけのことである。たまには夜中にも休日にも手術はするが、昼間、あるいは、翌日にどこかで寝る。寝ずに働いているわけでは決してない。緊急手術等で午前三時頃霞ヶ関を通ると、タクシーが長蛇の列をなしている。これから自宅に帰る役人を待っているのである。これを見て私は官僚の仕事も、もう少し経費節約上からいっても工夫して要領よくやれないものかと思うことがある。

若い頃は病院の当直が年末年始でもあたるのだが、なぜか私は大晦日と正月三日に日は当たったことがなく、片道半日仕事の山崎までどうにか帰ることができた。ある人は親思いだと言ひ、ある人は乳離れ、里離れしていないと言ひ。どちらも当たっているとと思うが、実際に帰ってみると三日で退屈する。身の置き所がないというか、正確には生活の場がないのである。それも当然で、東京に出て二十七年が過ぎているのである。それでも正月と夏休みには必ず帰る。自分自身にとって故郷とはそういうものだと思う。かといって、何をするというでもない。正月には日がな猫のようにこたつの中に潜り込んでゐる。夏休みは座布団を枕に縁側で鬼平を読んで暮らす。どこに行くわけ

でもない。会ってみたい幼友達も数人はいるが、出かけるよりはゴロゴロして暮らす。そして、東京に帰って行く。それでも正月と夏休みには必ず帰る。

私の父親は定年まで地方公務員で、二〇〇一年十二月二十七日に享年八十四歳で亡くなった。最初の何年間かはゆっくりとぼけが始まり、一時期大変手がかり、やがて半年ほど寝付いて亡くなった。最後の入院の何ヶ月かは母親が毎晩そばに泊まって看取った。亡くなった時、母親達は涙したが、人間の死を見慣れているからと言うわけではないが、私は父親は十分天寿を全うしたと思っている。喪主としてもそのように挨拶をした。人はよく「人間、楽に死にたいものだ」というが、医者として二十七年、多数の患者を看取ってきたが、「人間、なかなか、楽には死ねない」のが現実である。その点から見ても、ぼけて死ねた父親は幸せであった。

大変だったのが、母親とその周辺である。つまるところ「人間、楽には死んでくれない」のである。

奥さんが亡くなると、ご主人は後を追うようには言わないが大抵が元気がなくなる。ところが、ご主人が亡くなると、奥さんは俄然元気になる。それもそのはずで、女は二人分働いており、それが一人分になるのだから元気になるはずである。さだまさしの「亭主関白」ではないが、一日だけでも連れ合いより早く死ぬ方が男にとっては良いと私も思っている。そう言うわけで、母親は未だ俄然元気で、私は正月と夏休みには必ず帰る。

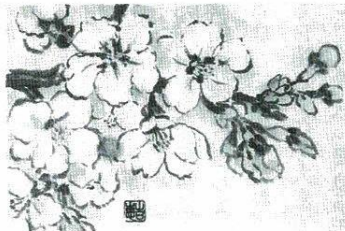
私は医者としては平均点よりやや上と思っているし、世間の評価もそんなところだろう。虎の門病院で、主に大腸癌の手術しかやらない外科医である。山崎の病院では使われない外科医である。勤務医であるが、重症の患者や、それを求めてくる患者には自宅の電話番号を教え、実際に絶えず電話がかかってくる。その多くは思い過ぎのことであるが、時には重大な事態もある。しかし、どれ一つとして煩わしいと思つたことはない。このことでは子供の頃の山中医院の先代の山中先生、今の山中先生のことを思い出す。夜遅くまで往診で走り回っておられる姿が目焼き付いており、正に町の開業医の原点はここにあると思ひである。

平均点より上の医者になったからか、時代のせいかわからないが、子供の頃よりはおいしいものをいろいろ食べてきた。しかし、未だに「あの頃のカレーライスはおいしかった」、「あの頃の卵焼きが食べたい。」思ひが募り、バナナをみるとつい買ってしまった。一本食べて後は腐らせる。そんなわけでやっぱり幼い頃が懐しく私は正月と夏休みには

必ず帰る。

三人の子供たちの二人は昨年三月にやっと卒業し、社会人となった。この三月にはもう一人も卒業する。妻は時間的、金銭的余裕ができれば海外にも行きたいと言う。「医者は儲かる」と思われているが大きな間違いである。医者になりたいと思った一端には「少なくとも喰わんがために働くことがないように」であったが、今でも日々の生活を支えるのが主目的で働いている。だが辛いわけでもない。むしろ仕事をしていることが楽しい。

結局のところ、いくら時間的、金銭的余裕ができて「正月は故郷で」が私の分にあっているのかもしれない。故郷とはそういうものだと思っている。



著者のプロフィール

沢田 寿仁 (さわだ としひと)

1949年7月11日、山崎町庄能(鴻の口)に生まれる。

1968年3月 山崎高校を卒業

1975年3月 神戸大学医学部を卒業

1975年4月 虎の門病院に外科医として就職

1998年1月 虎の門病院消化器外科部長、現在に至る

大腸癌を中心とした下部消化管の外科を専門とする

第二十四回春の芸能祭ご案内

日時 平成十五年四月二十九日(みどりの日)

午前十時から午後三時三十分まで

場所 サンホールやまさき(山崎文化会館)

主催 山崎町文化協会・山崎文化会館

後援 神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいませよう、
ご案内申しあげます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎謡曲同好会

山崎郷土芸能保存会 山崎邦楽邦舞研究会

さつき民踊グループ 播州山崎太鼓

バンブー・ファイブ 山崎町老人大学

短歌

郷土に贈る花束

(歌の匂い)

山崎歌人協会 稲村 幸子

「昭和四、五年頃は、山崎に入ると歌の匂いがする、と言われたほど短歌が隆盛で、云云」

右の一文の断片は、昭和五十二年発行の『山崎町史』の中に「山崎歌壇のあゆみ」として記されている一語である。誰言うとなく聞こえてくるこの言葉を、嬉しく、なつかしく、少し面はゆく耳にした記憶は、その当時から歌に携わっていた筆者にとっては消しがたいものがある。

「歌の匂い」とはどのような匂いであろうか。

先日、京阪神在住の歌人十数人より、山崎では非歌会がしたいとの希望が出て、当方は老人大学柏野短歌会会員十名が準備に当り、伊沢の里を会場とし小歌会を催した。

特筆すべきは、この話を聞かれた現代歌人協会の中堅歌人楠田立身氏が自ら参加して下さった事である。

秋色酣の山里に、総勢二十五人の小歌会三時間余、相和し相睦び、短歌愛好のよしみを熱くした。

中央指向、有名歌人追隨傾向の強い歌壇ではあるが、好んで辺鄙な地方の山里の無名歌人たちの素朴な歌に眼を注ぐ人たちもあるのである。

安田青風氏のお言葉を借りるならば、「これらの歌は、謂はば、私たちが自らの郷土に贈る愛らしい花束なのだ」そうである。

山崎に入るとその花束の匂いがするのかも知れぬ。そして、それは、素朴な野菊の花に似たような匂いはなからうか。

「歌話会」

平成十四年度 月例会出詠歌抄

■新春歌会（一月八日）

。九頭の馬駆くる図の掛軸を「うまくゆく」など言ひて商ふ

安東はつ子

。神戸より来れる幼が作り置きし雪のダルマが泣きはじめたり

新田 弘美

■如月歌会（二月五日）

。はじめの逢ひは馬駆け祭りの夜復員服に濡れて来たりき

山崎 智絵

■弥生歌会（三月五日）

。いとなく神経鈍りゆくものか昨日血落し今朝コップ割る

北 隆治

■卯月歌会（四月二日）

。愛子姫の写真の占むる朝刊に今日の憂き記事影をひそめぬ

嶋田 純孝

。自づから春に目覚めて咲く花に老の季節の速さを知りぬ

小林 郁子

■皐月歌会（五月七日）

。花の四月はわが家の忌月御迎えのありそうな気のとす季節

栗山 節子

■水無月歌会（六月四日）

。わが肩にほたる光ると誰か言ふ取らずにおくれ母かも知れぬ

岡本 光代

■文月歌会（七月七日）

。のほほんと卒寿生きをりにんげんに賞味期限の無きこそよけれ

稲村 幸子

■葉月歌会（八月九日）

。たばこに西瓜子らの手紙を胸にして甥は旅立つ西方浄土へ

竹添寿美子

■長月は郡民短歌祭共催のため休会

■神無月歌会（十月四日）

。空鏝おとのしきりに老い夫が刈り詰めてゆく檜の匂ふ

森本萬千子

■霜月歌会（十一月八日）

。嫁も娘も心せはしき日日ならむ訪なひくることも稀にて

青柳りやう

。白鳥の真白き羽が舞うごときカサ

ブランカの大輪の花

城内 悦子

。家族とふは脆き絆と思ふとき近く見えるオリオン星座

大井 千明



各地短歌祭入賞入選作品

(平成十四年度)

◇第二十二回宍粟郡民短歌祭

(九月一日・山崎防災センター)

- ・兵庫県知事賞
 - 。父親の大きズックにふりがなのごとと脱がれある黄のベビー靴
 - 岡本 光代
- ・兵庫県議会議長賞
 - 。絵日傘を差せるごとくにねむ咲いて娘はあたらしき命はぐくむ
 - 大井 千明
- ・神戸新聞社賞
 - 。介護せる夫を残して今日ひと日解かれしごとく美術館めぐる
 - 河野トミエ
- ・山崎町長賞
 - 。穂をはらむ稲田吹きくる夕風に汗の染みたる野良着乾けり
 - 垣内 松代
- ・山崎町教育委員会賞
 - 。水鉢の水のゆらぐは裏庭のかすかな午後の風の道筋 久保みや子
 - ・宍粟郡文化協会連絡協議会長賞
 - 。仔牛らの歛つる耳に確ともつ耳標は生れ在所を語る 伊東まさ子

- ・山崎文化協会賞
 - 。父親となりし息子が児に戻りくつろぎており我の茶の間に
 - 川端 紀子

- ・兵庫西農業協同組合長賞
 - 。恙なくひと日の過ぎしやすらぎをこよひ日記に短くしるす
 - 山村フサ子

- ・宍粟郡歌人連盟賞
 - 。ためらへる吾を捉へる自動ドアの薄きガラスが音なく開く
 - 安原 定子

- 。わが家には帰る者なく今日もまた過ぎゆく車の列をながむる
- 春名千代子

- 。常に一步退きて物言う友逝けり
- 青葉の山の光る六月 菅谷美津子
- 。神前に柏手打ちし手心えのたしかとなりて骨折癒ゆる 早川 君枝
- 。手土産は「話でいいよ」と母の言うコスモス揺るる秋の日溜まり
- 渡辺 澄子

- 。病床に「おーいおーい」と呼ぶ人の老いたる妻は聞こえず帰る
- 嶋田 純孝
- 。われの背に湿布をはりてくれる妻かかる妻ある事をよるこぶ
- 石原 幸夫

- 。いつの間に少女になったの夏帽子かぶり駆けゆく九歳の孫
- 佐伯恵美子

気前よく沢蟹をやり少しだけ兄貴顔する四歳の孫 秋田 嘉子

- 。明日より再就職をなす夫のくせある髪に白髪染めなす 中村 玲子

◇平成十四年度西播磨短歌祭

(十月二十三日) 西播磨文化会館

- ・県立西播磨文化会館長賞
 - 。さしすせそ吹きつつの調味にも馴れたり男ひとりの厨
 - 南 裕之

- ・兵庫県芸術文化協会賞
 - 。風邪ぎみの幼なと遊ぶあやとりの触るる指より微熱が伝ふ
 - 岡本 光代

- ・佳作
 - 。うづしほのやうに櫓を廻りる盆の踊りを驟雨が散らす
 - 嶋田 純孝

- 。二人のみとなりて久しき古家に捜し物するごとく夫が喚ぶ
- 森本萬千子



森本萬千子

宍粟郡歌人連盟は、郡内五ヶ町の歌人グループが合併して、昭和五十七年に結成発足した歌人団体である。その年の秋、山崎町下村記念館に於て第一回の郡民短歌祭を催して以来、毎年各町順番に会場を負擔し、今年、第二十一回目の短歌祭を山崎町で開催する事になったのである。

山崎町としては、今回が五回目の当番である。当番の町は特に精神的負擔も伴って心忙しい。五月に入るとすぐに五町の代表者会を開いて大筋の協議をする。それより開会に至るまでの準備万端は筆紙に余る。

幸い当日九月一日は好天気。開会前から県会議員様、町長様、教育長様、文協連会長様、来賓方が控室にお揃い下さった事は、会に緊張と活気をもたらす結果となり、終始密度の高い有意義な会を持つことができた。

尚、今回は特に教委社会教育課の方にはご援助に与り当日も種々ご尽力を頂いた。尚又講評の終わった後、一般質問に入り、神戸新聞支局の記者さんが手をあげて発言されるなどよい刺激を受ける事もあった。当日の入選者全員の写真が翌々日の神戸新聞の紙面に載っていた。

俳句

句

姫路城、好古園を訪ねて

寒い朝だったが、明るい参加者の顔が集い温かな吟行日となる。平成十四年卯月十四日。

車窓より見る風景は、車が走らず田や畑が走っているように見えた。

菜の花畑の鮮かな黄色が、黄のかたまりとなって後へ後へと飛んでゆく。

姫路城の濠に大きな鯉が泳いでいた。石垣の隅に水鳥の小さな家も浮いていた。

初代池田輝政が築いた城、幾星霜を経た平成の御代、私達がここに立っているのも不思議なような気がする。

姫山公園の桜は殆んど散っていた。残る花が折々の風に一片二片と散っているのも風情があった。落椿の赤い花が燃えるように敷きつめているのが印象的だった。天候に恵まれ上衣を一枚二枚脱ぎながら姫路城を見上げつつ散策。

・うららかや大天守閣眼界に

泊水

山崎俳句協会

青嶺句会 芦田八重

好古園は姫路城西御屋敷跡が庭園

になったらしい。潮音斎、竹の庭、築山、池泉の庭、等々。

・満天星どうだんの白き小鈴や築地塀

光子

・ひこばえも花一輪を咲かせをり

光栄

・石あれば椅子あれば座し春惜しむ

とみ代

・花の名を読みつつ歩む好古園

美保子

・又してもベンチを求め花づかれ

君子

・ピンク佳し深紅また好し牡丹園

千代

高いこっぽりを履いた舞妓さんに出会う。

・撮影会舞妓のだらり春風に

千代子

会場がなく披講されず、ゆったりとした吟行日だった。

帰りに書写の里の美術工芸館を尋

ね、元東大寺管長清水公照師の「すみ、いろ、つち」の世界を見学、張子のお面、昔なつかしい姫路ごま、明珍火箸など、など。

・泥仏まどひにおはす竹の秋

千里

工芸館の前の竹林の下に著我の花が水色を敷きつめていた。著我浄土のようだった。

それぞれ句のお土産を胸に、満ち足りた恵まれた私達の小さな旅だった。

・歩を止めて白鷺城と春惜しむ

八重

山脈句会詠草

霧まとひ降り来る僧の若さかな

高野 薫風

湖跨ぐ雷光太刀をひっさぐる

浅田 蕪耕

行く先はルソンかジャワか燕去る

池田 充

カサブランカ咲かせて陽気な未亡人

田中 恵

過ぎし日の修羅は語らず墓洗ふ

畑林 和枝

秋意添ふ子規の手ずれの硯箱

岡田 瑞穂

山の端に没り日とどめて秋深し

福田 祥栄

春蘭のそむきあひたる薄緑

宇野 幸子

さわらび句会詠草

目離せぬ児を追ひかけて青き踏む

小林 紫生

陽炎や見え来しバスの揺らぎつつ

山中 正子

パステルは百五十色薔薇画かむ

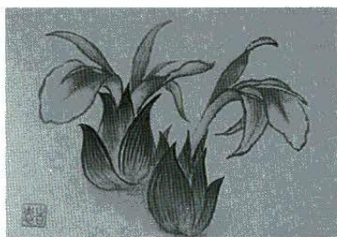
本條 淑子

いささかな平穩でよし髪洗ふ

壺阪加代子

夏草や遺跡に残る轍あと

庄 昌子



風に吹かれどこか幻秋の蝶

山岸その子

夢枕に立ちしは誰ぞ窓の月

薄木満寿恵

秋の夜病床日誌ペン重し

川崎 栄子

破芭蕉門閉づ家に仁王立ち

藤井 七代

朱倫句会詠草

白丁花少女のような二児の母

藍 千恵

食文化守るフランスかたつむり

井口 洋子

撫紅葉風に舞い散る裏表

構 よしえ

ねこじゃらし風に吹かれて知らん顔

木村今日子

組紐を織り上げてゆく春の彩

小島 弥生

遊ぶ子の髪に野辺吹く彼岸花

佐倉 涼子

吹き抜けよ唐松林雪の果て

千種 洋子

山頂の篠子の道を風となり

中津 洋美

天落ちず蜻蛉が遊ぶ円周率

ひな蒲公英

万緑に空席のあるキックオフ

藤井 弥生

或街の二人の余生枯れざくら

三浦 ゆき

羽筵バッタの足の輝いて

山下 由美

銅鐸に刻まれし絵の人と虫

吉田 弘子

氷の山霧の中へと下りてゆく

大西 清吉

連山へ梵鐘を打つ夏の果て

栗山 章

撫林の湿地に開花山紫陽花

小林 優

隠れ里幾つも越えて夏の山

鈴木 亮

日名倉の忽忘草を離さざり

中原 俊

山笑う六法全書開くかな

福井 泰好

薬師寺を通り過ぎたる二月かな

岸野 皓午

青嶺句会詠草

鉄線の鉄の茎もて咲きにけり

芦田 八重

藁苞に嬰抱くごと寒牡丹

秋久 光子

暎れば今に万朶の花吉野

秦 千里

春浅しまだ覚めやらぬ寝釈迦山

石野 光栄

蝉しぐれ読経に和してさかんなる

小畑 ぬい

縄のれんくぐりて出れば寒昂

高野 薫風

花の雲天守浮かべて咲きほこり

下村 君子

寒桜華やぎもなく楚々と咲く

杉山美保子

灯籠を流し古里あとにする

田中 良子

棟上げの梁高々と十三夜

鳥羽チエノ

多分もう逢へぬ別や十三夜

永井とみ代

筆太の一字の凜と寒座敷

藤家 千代

看護る灯を小さく点し夜の長し

山口 栄子

寒紅をひけば口許はなやぎぬ

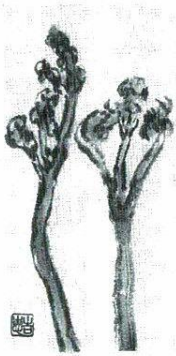
和田千代子

古希の膳夫婦で祝ふ良夜かな

三浦 ゆき

古里の低き土橋や水温む

福田 泊水



会の歩みと

百号記念誌

山崎郷土研究会

森本 一二

私は今春、郷土研究会会長を仰せつかりました森本です。

堀口前会長は、山崎藩並びに町家研究の第一人者で、十八年の長きにわたり会長を勤められ、この度ご病氣のため退任されましたが、その偉大な業績に対し、深い感謝と共に、後任の重責を感じています。

本会には、会報・研修・史跡の三部があり、会報部は郷土会報の発行に当り、研修部は歴史探訪の研修旅行を計画実施し、史跡部は史蹟、文化財の保存と広報などを努めています。

そのうち本年は、山崎郷土会報が秋刊を以て百号に達し、その記念誌を発行出来、誇らしい年になりました。

そもそも本会は、昭和八年に、栗郷土研究会として発足し、会報を「ししは」と名付け、今は亡き島田清先生をはじめ、諸先輩の郷土研究を発表されたのに始まりましたが

昭和の大戦前後の混乱期には、会の活動もどこおりがちになり、会報も一時は中断したりしていました。その後、年を経て昭和三十三年、

時の村上町長を会長に新しい体制を立て、山崎郷土研究会と改称し、会報第一号を発行しました。

その後、昭和六十三年には、創刊三十周年記念号が出来、時の堀口会長は「……当初二百名足らずの会員が六百七十人の大団体になりました。」と盛會を謳っておられます。

以来更に十五年、春秋二回の発行が、百号の大会を達成したのです。

このため秋刊号を、創刊百号記念と名付け、意義深い会報にするために名誉会長の白谷町長、名誉顧問の壺阪文化協会会長のご祝詞をいただき、会報に華を添えてもらいました。

又続いて本会の沿革や各部の長年の歩みをまとめて載せるなどしましたので、記念誌の名にふさわしいものになったと喜んでいきます。

今この会報を開いて見ますと本会の長い歴史や先輩の方々の研修と努力の跡が読み取れ、後に続く私達を励ましてくれています。

以上百号記念誌に事寄せ、今の歩みをまとめて見ました。

山崎植物同好会の活動について

山崎植物同好会 久宗 丑雄

山崎植物同好会は昭和六十年八月に発足以来、毎月一回、栗郷郡内の

国有林、神社、寺院の森、山野等で植物観察会を開催しています。年一回は観光バスで、県外の有名な地に

出かけます。今年は七月に鳥取県の「ふるさとの森」で、昨年は岡山県

の「森林公園」へ、一昨年は滋賀県の伊吹山の頂上の「お花畑の高山植物」を観光バス二台で百名余りの会

員が参加しました。会員も発足当時は二十数名でしたが、回を重ねる度

に増え続け、現在は百数十名となり、遠きは毎月大阪、神戸、姫路、龍野

の地より多数の会員が参加されます。植物同好会の観察会の当日は、午

前八時半に山崎小学校校門前に集合し自家用車二、三十台に分乗して目

的地へ出発します。今年度の観察会は次の通り実施しました。

二月十六日(土) 総会、講演会、四月十六日(土) 波賀町水谷

五月十一日(土) 山崎町岩上神社

六月八日(土) 千種町三室山

七月十二日(金) 鳥取県八束町

八月二十四日(土) 南光町瑠璃時

九月十四日(土) 上郡町テクノポリス

十月十一日(金) 山崎町生谷

十一月九日(土) 山崎町もみじ山

この写真は七月の鳥取県八束町の「ふるさとの森」での観察会の記念写真です。

この会は、発足以来十七ヶ年、回を重ねること百五十回、活発に活動が続けられるのも、実地にて観察指導をして下さる内海功一、井口武一先生、毎回百数十名の会員に観察案内状を発送して下さる鳥越茂先生、会費の徴収等会計面を担当して下さる伊藤一郎氏、会の運営を指導して



下さる藤村清一、古池末之、河本雅視、岸本正理、石田昌志理事さん方のご指導の賜とお礼を申し上げます。

春服

新潮会

浅田耕三

数年前、山崎町商工会や郷土振興会が、山崎闇齋研究家の岡田武彦先生を招き文化会館で講演会を開催されました。

その先生の著書『山崎闇齋』の中にこんな一節があります。

「養菴は性酒脱、人から孔子の門人で超脱的な気象を持った曾点の流を汲む（ものと評され）云云」

この曾点という人物は、岡田先生がたとえに挙げておられる通りの脱俗軽妙な人がらだったらしく、『論語』の中にこんな逸話が載っています。

ある時、孔子が四、五人の門弟と小舟で湖を渡っていました。この頃孔子は諸国を歴遊し自分の学問、思想上の理想を国々の政治に実現して民衆の安寧豊潤をはかるべく諸侯に遊説していました。がどの君主も武威を張り財を得る事にばかり熱心で孔子の言に耳を傾ける者などいません。さすがに孔子も無力感にとられ力なく舷にもたれていました。

ふと横にいる門弟の一人に尋ねました。「お前は将来どんな事をやりたいと思っている。」

と、その門弟は、私は一国の宰相となり先生に教わった学問を政治に活かし人々の幸せをはかりたいとこたえました。次の一人は大教育家になり多くの門弟を導きたいなどそれぞれ孔子の高弟らしく立派な、そして青年客気に溢れた返答をします。しかし曾点一人、臚で瑟をポロポロ弾いているだけで黙っているのが孔子が「点、お前はどうか」と訊くと、自分ののぞみは小さくて恥ずかしいからとてもみなさんのように言えませんと尻込みします。孔子がたって促すと、やっと口を開きました。

「春がくると新しい春服を着て近所の子供達と野山へ出かけ、川べりで春風に吹かれて水遊びをし、日が暮れると歌いながら家路につく、そんな平凡な生活が私の願いです。」

と、孔子は思わず「私も点に賛成だね」と膝をたたきうなずきました。

この部分を原文はこう記しています。

「莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而归。夫子喟然歎曰、吾與点也。」

随陽寺の花の宴

バンブーファイブ 千田 淳平

山崎町の随陽寺境内に見事な枝垂れ桜があります。花が美しい頃に合せて、バンブーファイブの演奏会が夕方七時頃に行われます。

バンブー5は、尺八をメインにして後は洋楽器奏者で演奏する変わった編成の楽団です。発足当時は尺八の音程に合わず難かしさに戸惑い、試行錯誤しましたが何とか克服して週一回の練習を続けて何時の間にか九年になります。民謡から流行歌スタンダードジャズ迄手広くレパートリーを広げてまいりました。各奏者の技量はともかくとして、アマチュアのバンドで結成以来一人の脱落者もなく今日まで続けられたのは各自の音楽に対する情熱とチームワークの賜と思ひ息の合った演奏をお聞かせできると自負しております。

随陽寺で毎年春に行われる音楽会は吾々の演奏のみを聞きに



随陽寺で毎年春に行われる音楽会は吾々の演奏のみを聞きに

来て下さる人々だけが集まるバンブー5の独演会です。本堂は天井が高く音響もよく客席に椅子を置いて楽に百名近い人を収容出来るミニコンサートを開くのに最適な会場です。一時間半程の演奏を最後まで熱心に聞いてくださる観客を前に、この日の為の練習がむくいられて満足感でいっぱいになります。

本堂から見ると一本の枝垂れ桜はライトアップの光線に一段と映え咲き誇る花々は夜空に浮かび、その妖艶な姿は息をのむほどです。

このような素晴らしい会を毎年もって早いもので今年で四回になります。この会を発案して下さった理解ある住職夫妻、檀家の皆様方のご好意、この会の接待をして下さるボランティアの方々、毎年楽しみにして聞きに来て下さる皆様方のお蔭と心から感謝しております。

来年の平成十五年は吾々楽団の十周年に当り演奏会も五回目になります。

来年も吾々精いっぱい演奏を是非聞きに来て下さい。

播磨國風土記

にある宍禾郡

山崎詩舞道連盟

小川登

風土記は元明天皇の時代、紀元七一〇年頃に完成している。其中、残っているのは出雲、播磨、常陸、肥前、豊後の五箇国だけである。

宍粟郡は播磨風土記にどのように記載されているのであろうか。宍粟郡は「宍禾郡」と記されている。宍は肉であり、禾は穀物の総称であるが、良い穀物、稲を表している。狩猟と、農耕を生活の基盤としている地域の特色を、郡の名前にしているのである。

郡の地域は略々、現在と同様であるが、新宮町の平見が宍粟郡に入っていた。宍禾郡の里は七里である。1比地里Ⅱ現在の上比地、中比地、下比地と宇原村。比良美村、川音村、庭音村（不明であるが、狭戸ではないかと類推される）

2高家里Ⅱこの里には塩村一村より書かれていない。都太川の記載があるから、塩村は庄能と考えられるから、庄能を含む葛沢村である。

3柏野里Ⅱ土間村（土万）敷草村（千種）が記されており、柏野は「柏生う」加生と考えられるので、菅野、土万、三河、千種の地域である。

4安師里Ⅱ元は酒加里と言ったところから、須賀沢を含む安師村であろう。

5石作里Ⅱ伊賀麻川があるから、五十波を含む揖保川東北部並に一宮町の南部を指すものと考ええる。

6雲賀里Ⅱ現在の一宮町閭賀以北の引原川流域と思う。

7御方里Ⅱ一宮町三方、繁盛地域と言える。

伊和大神と天日槍が土地争いをした記述が、播磨國風土記に述べられている。伊和の大神は古くからこの土地を占有していた神であるから、「葛籠」投の説話を引くまでもなく、矢田村、宇波良、比良美、伊加麻など、伊和大神と関係の深い地名が沢山ある。天日槍が命名したのは川戸、高家里だけである。

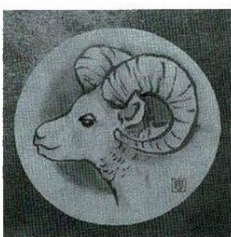
何れにしても風土記以前から、新旧の神々の争いの原因となった宍禾郡である。古くから開けた土地であったと言う事が出来るのである。

篆刻

昭和会
英保英一

書法の一科に篆刻と云うのがあります。篆刻は広く印のなかまに含まれます。そしてその印の字には篆書体を用います。此の篆書体と云う字は、現在には使用しない古代の漢字が基本になります。此の古い漢字篆書を用いますから篆刻と言います。印章ですからそれを使って証明すると言ふ機能を持っています。日常よく目にする認印や会社の社判、学校の校印なども同じ仲間です。しかし一般に云う「ハンコ」と篆刻が全く同じかといえますと、やはりこれは大きく異なるものがあります。まず「ハンコ」は証明するための用が足りればそれでよいのですが、篆刻はその用に更に美しく個性的であることが要求されます。美しくを要求されるのは書の一科だからです。漢字やかなと一緒です。篆刻は作るのにルールがあります。これは古い伝統に培われたものですから、古典というルールの上を誤字を作らぬよう

に、時代の混交に気を付けて脱線せずには走らなければならないのです。此の古い漢字篆書はさらに、毀、周、秦、漢とそれぞれの時代で字形が異って居ります。これらをしつかりと見分けて作って行く事が篆刻の醍醐味なのです。書と隣り合せに接しているながらも、書とは違った魅力を持たえた世界「方寸の中に天地を宿す」とはよく言ったものです。小さな方寸の世界に情熱をそそぎ込み、神経をすりへらしながら、それでも何ものかを表現しようとする行為には、きわめて限定された制約の中での行いだけに何とも表現のしようのない思いが秘められて居ります。篆刻には楽しいことがたくさんあります。書く、彫る、押すという制作過程での楽しみ、そして見る楽しみと、もつ喜び、書的な味わいと版画的な味わいがあります。私は此のあまり知られていない篆刻の世界をのぞき、不思議な魅力を感じながら楽しんで居ります。



踊れるしあわせ

邦楽邦舞研究会 岡田 正子

朝起きて窓をあけると、ぐるりと美しい山並みに囲まれた盆地、山崎子供の頃はこの山を越えたら広い世界があると、いろんな夢を描いていました。

子供も成長し第三の人生を迎えるに当り山崎に住むことにしました。私は山崎で育ち友も沢山いますが、主人は岡山出身で、当地の知人も少ないので老人大学に入学することに決めました。歴史探訪で山崎町内、西播近辺の歴史を勉強したりして、有意義な毎日を送っています。

クラブ活動で若柳吉紫俳先生の若柳流の踊りがあり、早速入部して皆様の踊りの仲間に入れていただきました。歌謡に合わせて新舞踊を踊るのも最初の内はむづかしく、足と腰の使い方にとまどいました。

子供時代を振りかえれば、踊りの稽古に通う、寺町界限では三味線の音や、小唄が聴こえ、旭座では、芝居、文楽、浪花節などがかかっていた夜になると親に連れていってもらうのを楽しみにしていたのを思い出します。

その後映画の全盛時代になり、新

富座、山映館と二つの映画館があり、美空ひばり、中村錦之助、石原裕次郎、吉永小百合らの映画を見るため中学時代には通ったものです。

子育てに追われ働いていた時代、あわただしい生活に追われていた時と比べ、今は時間が沢山あります。また行きたい所へ動ける体力もあります。私の人生に潤いを与えてくれる趣味の踊りがあります。

杉谷茂子先生の指導を受けて、むらさき会の皆様と共に習い、一緒に過ごす時が一番充実した楽しい時です。

踊るアホオに見るアホオ、同じアホなら踊らなソソソソ”と踊り子供の頃に稽古事をさしてくれた両親に感謝！

家族の協力と理解に感謝しているこの頃です。終の住み家になった山崎。さわやかな自然に囲まれた山崎でゆっくりと、のんびりと、毎日を楽しまたいと思います。

Y・O・Bの活動状況

山崎町合唱連盟

片山 澄之

YOBの男声合唱団員数は十名余りで非常に少ないのですが、音楽才能豊かで指導熱心な栗山美信先生のもとで、毎週月曜日の夜八時〜十時まで歌唱練習に励んでいます。

栗山先生の指揮になって三年余りで歌い上げた曲は次のとおりです。

○大木淳 伊藤整 尾形淳之介 八

木重吉作詞 多田武彦作曲「雨」

○堀口大学作詞 清水脩作曲

「月光とビエロ」

○北原白秋作詞 多田武彦作曲

「柳川風俗詞」

以上三曲はいずれも男声合唱組曲で、このほかに、宮城県民謡、竹花秀昭編曲「芥太郎節」、イギリス民謡、エマーソン編曲「アニーローリー」などです。

これらの曲を用意して、この一年間に次のような催しに出演してきました。

○十二月二日 ふるさとの心を歌う西播磨音楽祭 (相生市民会館)

○三月三日 六粟の森合唱祭 (山崎文化会館)

○四月二十九日 西播磨フロンティア祭 (播磨科学公園都市)

○九月十日 ハワイアンフェスティバル二〇〇二 (塩荘荘)

○十一月十日 播州合唱祭 (姫路文化会館)

今年三月には、また六粟の森合唱祭がやってきます。快いハーモニーで聞き手の心にしみ込むようにしっかりと歌おうとはりきって練習をしています。

歌は心の灯火、平和と生きる喜びを与えてくれます。YOBはもっと多くのメンバーで力強い合唱がしたいと思っ
ています。歌の好きな方、こぞって入団してください。



すばらしいことをみつけよう

山崎茶華道協会 萩 藤 よし子

各地で紅葉の便りが聞かれる十一月は、秋と冬が混在しており、今年早くに雪が降りみんなを驚かせました。昔から「青山に雪は暖冬」と言う諺がありますが、果して今年はどうでしょうか。私は最近、物事を楽しく見るように努めています。そうすると良い一日が過せます。身近な所でも楽しさやすばらしさを見つけることが出来ます。向いの山のお大師様にすばらしい紅葉があるので。樵や、山桜の木々が黄色く赤く深みをまして秋のいろになってくると、お大師さんの紅葉もひと際美しくなります。この美しさに昨年まで気がつかなかったのはどうした事か。良い時季に巡り合わなかったのも一つですが、心のゆとりや楽しむ目で物を見ていなかった事にもあるようです。「山もみじ」の大木が、空を覆うように拡がって、今年も期待通りの美しさです。しだいに：まっ赤にもえ、散ってゆく紅葉の景色もすばらしいものです。皆さんもそっと訪ねてみて下さい。昨年十一月の事です。紅葉まっ只中のお大師さん

へ地域の「歩こう会」の方々が大勢お参り下さいました。前日から当屋の私達が心を込めて、仏様をお祀りしました。当日は落ち葉を集めて焚き火をし、その火での焼芋と季節の香りの柚子湯は、身も心も温めてくれました。煙のにおいも心地よく、やさしい温もりで寒い時の何よりのお接待になり喜んで下さいました。その嬉しい顔に私達もまた嬉しくなってお互いに心を通じ合う一時でした。引率の先生の仏像の話も興味深く、昔の賑わったお大師さんのお接待の話等、話題も広がり楽しい一日になりました。満ち足りた暮しの中にもその時々合ったお接待の心も永く続けて行きたいものです。この事は茶華道の心にも通じると思えます。「二服の茶」「美しい生花」は、やすらぎを与えます。稽古を積み重ねていくうちに楽しみを見出し迷いの多い人生の道標に出来たらそれは最高にすばらしいことです。今日も自分なりの楽しみ方や、すばらしいことをみつける努力を続けながら働いています。

謡曲の響や紋付袴に白足袋といった落ち着いた雰囲気憧れた、鶴崎和美先生に入門させて頂きました。しかし、習いはじめてみると言葉が難しいという物語が前半は現世を語り、後半は死後の世界へと展開していくなど全体の情景がわからないまま謡うので、謡曲の楽しさなど感ずることができません。

そんな時先生が、「謡曲は映画で言えば俳優さんの脚本で、映画を見たらよくわかるように、謡曲も能を見ないと物語りもシテ・ワキの情念も理解しにくいのでは。」と話して下さいました。それから能の鑑賞にご一緒させて頂くようになりました。最近私が謡曲同好会で「融」を連吟しました。その一ヶ月ぐらい後にその「融」を杉浦元三郎さんが上演されるので、いい勉強になるだろうと姫路のキャスパホールに連れて行って頂きました。前場の汐波み老人や後場の月光に浮き上がる貴公子が、笛・小鼓・大鼓・太鼓の音にそって舞う姿の優雅さに心ひかれ、さすが人間国宝だなと感心しました。また、地謡や囃

心を写す鏡に

山崎謡曲同好会

竹 添 齋

今、北朝鮮に拉致されて二十四年という永い年月を経てやっと帰国された五人の方々が、今なお北朝鮮に残されているお子様やご主人の身上を心配されています。その苦悩は、謡曲「隅田川」の子供を人買いにさらわれて狂人となった母親の思いとも重なり、現代版「隅田川」の悲劇とならぬよう一日も早い帰国を心より願うものであります。

謡曲を心を写す鏡にして、いい齢を重ねて参りたいと思っております。



和とふれあいの心で

さつき民踊グループ

梅岡亨栄

二十余年も続いているさつき民踊グループにおさそいを受けて仲間入りさせて頂き二年余の私です。現在はグループの会員と楽しくお稽古に励んでいます。さつき民踊グループはボランティア活動として養老施設等にお招きを頂き、年に十回程度訪問し、お年寄りの方達とのふれあいと親睦を図っています。又年二回の春の芸能祭・秋のふれあい文化祭と舞台上立って、楽しみと緊張感をグループと共に経験しながら踊りを通して色んな事を教わっている私です。私達の先生は坂東流坂東寿賀幸先生です。立派な先生に教えて頂きながら仲々上達のない私で申し訳なく思います。ある日のこと、相手と組んでの踊りの時です。相手は身長も体型も良い人で「先生、身長等合っている方が見た感じもいんじゃないでしょうか」とつい口にしてしまいました。すかさず先生は「体型等合っていないなくても気持が合っている

といいですよ。」と言ってくれました。何事にも一生懸命で芸の道の先生と言うよりも、人生の師として尊敬できる素晴らしい先生です。気持ちを合わせお稽古に励めば自然に踊りも上達してくるものだと教えてくださった先生に頭の下がる想いが致しました。

さつき民踊グループ会員は和とふれあいの心を大切に、何よりも素晴らしい坂東寿賀幸先生とグループリーダーの西川さんにお出逢い出来ましたことに感謝し、又家族の理解と協力に感謝し、元気に生きたボランティア活動を続けて行ける様にお稽古に励みたいと願っています。

やまさき

スポーツクラブ21

囲碁教室

山崎囲碁同好会

松本明

県の推奨事業である兵庫スポーツクラブ21が、当地でも山崎スポーツクラブ21として最近ようやくふれあいウォーキングやその他のイベント

の卓球、ソフト、バドミントン等の活動が始まりました。その中に純粹にスポーツといえるのかと、おもわれる点もあるが、盤上での頭の格闘技ともいわれている故もあってか、文化的スポーツとして、今回、囲碁も、先だつての募集で、二人の女の子を含む一年生から六年生までの小学生十三人の応募があり、十月十二日正式に囲碁教室が発足いたしました。不肖私もボランティアの講師として、その任に当たることになりました。

過去に小学生を対象とした囲碁教室の講師を体験したことがあって、楽しくもあるが、教えることの難しさ、そして子供相手の大変さも感じているところ、碁友の清水昌和氏が講師として応援して下さることに、なんとかこの任務を遂行することができると、意を強くしています。

以前この欄でも述べてきましたが、囲碁が生涯を通じて如何に楽しめるものであるか、ということをもっと多くの人に知ってもらって、どんどん参入してほしいと考えていましたので、今回の企画には願ったりかなったりの気持ちで、講師役を引き受け

させていただきました。ただこのたびの募集では、大人の応募がなかったことがとても残念でありました。

一回が二時間の教室で四、五回終わったところの段階では何も結論づけることはできないが、子供たちがとても活き活きと反応してくれるので、われわれも実に楽しくやらせてもらっています。子供たちは今では、九路盤を使ってルールを覚え、なんと対局できるまでになったので、碁の楽しさに少しは触れることができたのではと思っています。ここでもう少し進歩すれば、碁が生涯忘れられないものとなること必定でしょう。後は本人の努力しだいでは将来が大いに楽しみなものとなるのです。そうなる過程で仲間をふやし、お互い切磋琢磨し、棋力向上につながってゆくことになり、それがそのまま地域全体の、碁の層の厚さをまし、レベルアップにつながってゆくのです。そうなることを期待してこれからもできるかぎりの応援をしたいと思っています。



絵画よもやま

山崎美術協会

福岡 久 藏

絵画の作品批評会などで、「この絵の主題は何ですか。」という質問が作者に対してよくでていました。

絵というのは作者自身が描きたくなったり、描かずにおられなくなったりして描くものです。それだけにその時の作者の気持ちや、感動が作品から伝わってくるのが大切で、その上、主題が分かると作者の意図が一層よく理解できるので、当然の質問のように思っていました。

ところが、最近では、「この絵の見せ場どこですか。」とか、「主役、脇役の関係はどうなっていますか。」「脇役はあくまで主役を立てることに徹することが大切です。」などとこれまでに聞くことがなかった言葉を聞くようになりました。言葉だけを拾うと、まるで演劇の話か、舞台の上での事のように聞こえます。

このことは、これまでの絵が作者の独り善がりでも許され、観る人に作者の意図や主題が十分伝わらなく

ても、それはそれで良しとしていたということのようです。

例えていえば、甘くみずみずしい柿を描こうとしたのに、柿を入れた籠や柿の葉がいやに目立った作品。冬の厳しい寒さにも揺がない堂々とした山を描きたかったのに、その下を流れている川の水の冷たさや、寒々とした川原の様子がとても印象深かったりして、作者の意図や題名とは裏腹に、観る人にとって大変分かり難い作品だったというのでしょうか。そういうことから、作者は主題をもっと適切に、端的に表現しようとしての言葉のように思います。

実際、制作している私にとって、「主題をしっかりと描きなさい。」「主役をはっきりさせなさい。」と言葉では簡単ですが、「描き過ぎはだめ。」「筆の置き時が大切。」といわれればなんとなく迷路に誘い込まれるようです。

見えるもの全てが三次元の世界を、絵画はそれを二次元の中で表現しようとしているのです。上下の高さや左右への広がりや描き易いですが、奥行きや、距離感というのは難しいようです。私はやっぱり、わたし流で情感を大切に表現したいです。

趣味を生かした 花づくり

播磨さつき会

田口 實

今、育児に余裕のできたお母さん方は、四季の草花を寄せ植えとか、ポットやプランターで垣根にさげたり、玄関脇のガーデンングなどそれぞれに工夫され、お楽しみでしょうが、これを互に見せあってふれあいの場ができ意見交換することによりコミュニケーションが進展するきっかけにもなれば大きな収穫と思えますが如何でしょうか。

草花にも家庭の回りにあるもの、河原や山へ行つて採取するものなど沢山ありますが、これら山野草を楽しまれる方々は相当のマニアでありましょうが、そこへ葉草をプラスすれば、楽しみが倍加し、交換会、即売会に些少なりともプラスになるが如何でしょうか。

さて、おじいちゃん、おばあちゃん方、畑仕事で健康保持のために最も適度な運動で花卉花木や野菜づくりが一番お楽しみでしょうが、今一度、町花さつきを思い直していただいて、さつきの栽培普及に是非お力

添えを賜りたいと願っております。

苗木づくりは挿し芽で二年目には立派な苗木として販売できますが、作品としては少くとも五〜六年を要します。幸いにして今はJA兵庫西山崎統括部のご配慮により旬彩蔵という会員になれば何でも自主価格で出品できる施設を設けて下さっていますので、苗、半製品、完成品など自己意志により出荷できる体制が整っており、努力次第で大いに活用ができます。花の姿、形は異なっていますが種類ごとに各々特徴ある花を咲かせてくれるところに魅力があります。昔から花を見て怒る人はいないとか、花を取っても盗人とはいわれなくても言うように庭先の花をつい一枝折つて失敬するのも花の美しさにひかれこのこと、とがめだてすることのない所以と言えるでしょう。

町内至るところ、花いっぱいを目ざして、花のように美しい心の人づくり、やさしいいっぱいの人づくりこそ、心豊かな町づくりと言えるものと信じております。

(事務局は山崎町役場商工林業課です)「さつきづくり」のご質問、ご相談などお寄せいただければ幸いです。

やまさき文化によせて

雑感二題

平成会

秋田 裕 三

その1

私の身近な出来事から思う事を少し書きます。数年前の事ですが、小社に来られた外国人のバイヤーの方がふと、漏らされた言葉「アジアに於いて日本人は必ずしも尊敬されていない。経済力を背に発展途上国に對しおごりがある。物質的に余りある日本人の考えは少しおかしくなっている。」と。その言葉を聞かされた時、ドキッとしました。二十世紀、工業力がつき、日本の指導を必要としない時、日本人は嫌われます。その時のしっぺ返しを受けるのは次世代の子供達です。そうならない為にも今、誤っていると思う事は素直に是正し、時代の変化に対し、問題解決力を身に付けねばなりません。今の子供達は物質的豊かさに於いて他国に比べ様もなく恵まれています。しかし、精神面で失っているものも多いです、大人も子供も同じ傾向だと思えます。日本の豊さと云うハンディーキャップを引けば日本人はあまり立派でも何でも有りません。次の世代がアジア諸国と、信頼と友愛に満ちるとともに発展の道を歩もうと

望むならば、今こそバランスの取れた教育を与えないと手遅れになりそうな気がしてなりません。円周率を3にしたり、塾の補習に頼らねばならない5日制など、国力を落とし、未来に禍根を残すと危惧するのは私一人ではないと思えますが皆さんはどう思われますか？。

その2

動物生態学に詳しい方のお話を紹介します。

野生の日本狸はグループ内で共同便所を形成するそうです。毎日仲間のウンチを覗き見て自分もそこにするそうです。仲間のウンチのかすから自分が食べた事がない食物を見つけ出し、安全確認とえさに関する情報収集を自然に学習するそうです。特に子狸にこの傾向が強く、アウトローの一匹狸は生存率がとても低く、グループの狸は生存率が高いとのこと。自然界の摂理とはいえ考えさせられます。

IT技術に振り回されている人間は進歩したアウトローなのか、テロのニュースを聞くたびに生存率が低いのか、高いのかよく分かりません。文化交流、井戸端会議、隣保の会議、研修会、呑み会、等々なんでも大歓迎。雑学にこれ励み、狸のウンチにも学び文化を少しでも発展させ生存率を伸ばしたいものです。

平和を願って

山崎児童合唱団

塚田 美 紀

「どうしてそんなに恐い顔をするの？。もうクリスマスが終ってしまったから。だったら毎日がクリスマスだったらいいのに。みんなニコニコできるのに。」これは戦争で毎日辛い思いをしている子供の言葉です。湾岸戦争の時もそうでしたが、クリスマスを大切にしている国の人達は一時休戦し、お祝いをするのです。弾が飛んでこずに爆音もしない一日、大人がニコニコしている一日、子供にとってはどんなにうれしい日でしょう。

「大統領閣下、申し上げます。ここに貴方の手紙があります。これによると月曜日までに入隊するように命じられています。だけど私は恐らく人を殺すなんて出来ないでしょう。貴方に背くつもりではなく、明日私は逃げ出すでしょう……。恐らく貴方は軍や警察に命じるでしょう、脱走兵を探し出すように。それが貴方の職務だから……」

これは「脱走兵」というシャンソンの一部です。貴方に命を奪われても貴方をうらみません。なぜならそれが貴方の仕事だから。戦争のしくみや、開戦の理由など私にはわからないことだらけですが、子供達が地雷のない大地で思いっきり遊べる様に、大好きな歌を大きな声で思いっきり歌える様に、ノートやえんぴつを使って勉強できる様に、きれいな絵の具やクレヨンで絵が書ける様に世界中の子供達が平和にくらしている様に願わずにはいられません。我が家の子供達は十一月後半になるとクリスマスビデオを見て、サンタさんへプレゼントの手紙を書くために新聞の広告を持ちまわり、「これにしょか、あれにしょか。」と頭を悩ませています。この文章を書いている私もサンタさんが大好きで、クリスマス前になると心がウキウキしてしまいます。こんな平和な生活がずっとずっと続きますように。二〇〇三年も平和な世の中でありますように。



秋のふれあい 文化祭に参加して

西町獅子舞保存会

長 田 孝

十一月三日「秋のふれあい文化祭」に初めて出演させてもらい、今まで練習してきた獅子舞を披露することができました。

当日の文化会館は、一杯の人で埋めつくされ、熱気に満ちていました。

子どもたちは、何ら動くことなく、堂々と踊り、しかも勇壮な舞を見せてくれました。会場からは、演目ごとにたくさん拍手をいただき、三歳になったばかりの幼児のパフォーマンスに大きな喝さいを博しました。

西町の獅子舞は、昭和六十年に、三十六年ぶりに復活しました。当初、青木獅子舞保存会の方々に、舞や笛、太鼓の指導を受けましたが、一曲覚えるのに大変苦労しました。

演目は、一曲一曲とレパートリーを増やし、現在は「八洲」「剣」「神獅子」「鼻高」など八演目。笛、太鼓に合わせて獅子の周辺で踊る、おかめとひょっとこも人気を呼んで



います。

獅子舞の練習は、八月の盆すぎから約二カ月間で、初めは週一回のペースですが、祭り近くになると毎日となり、練習にも熱が入ります。子どもたちは練習を楽しみにしているようで、練習日には壮年会の指導者を迎えてくれます。

子どもたちにも、小さな時から獅子舞に親しんでもらうために、子供獅子（八頭）を取り揃え、幼稚園児から中学生まで出来る内容にアレンジした獅子舞も取り入れています。

出演後の子どもたちは、やり遂げた時の満足した、一番いい顔をしていました。壮年会を中心とした獅子舞保存会のだれもが「本当によかった。うまくいった。」と喋っています。

した。

この獅子舞を通して、高齢者から子どもまで全員が力を合わせ、地域が一体となり、伝統文化にふれる活動をしています。

近年の子どもたちは、叱られることが少なくなっているといわれていますが、獅子舞の練習をしている時は、壮年会の指導者に叱られることも度々です。しかし、子どもたちは、いやがらずに練習に取り組んでくれ、

和太鼓の音色

播州山崎太鼓 久 保 孝



考えます。

もっと良い時が来るまで、皆で努力をして力を合わせて続けていく事が大事だと考えています。

やる気の有る若者はいっても歓迎しますので、飛び込んで下さい。何かが変わると思っています。

楽しみにしている子どももたくさんいます。

大きい子が小さい子を指導したり、面倒を見たりすることで、思いやりの心も育っているようです。

今後、伝統文化の継承と後継者の育成に力を注いでいくと共に、子どもたちの地域活動への参加を応援しながら、この獅子舞、獅子屋台を保存し発展させていきたいと考えてお



事務局だより

◇文化施設の見学研修

平成十四年六月十一日、神戸市中央区脇浜通りに新しくオープンした兵庫県立美術館「芸術の館」に出かけて見学研修を行った。参加して下さったのは壺阪壽会長はじめ副会長、理事の方々や事務局関係者ら二十六名。

美術館では開館記念第一弾「松方・大原・山村コレクション」などでたどる美術館の夢」と題した美術展が開かれており、参加のみなさんは新しく広い会場にずらり展示されたセザンヌの「ジョルジョーネの、田園の合奏」より。マネの「ビールジョッキを持つ女」。ピカソの「読書する婦人」。ルノワールの「泉による女」。藤田嗣治の「私の夢」など素晴らしい美術作品を約二時間二十分にわたって鑑賞。このあと絵画などを鑑賞しての感想を話し合うなど研修もした。

◇山崎児童合唱団第25回演奏会

平成十五年一月二十六日、山崎文化会館大ホールで開かれた。団員らが日頃の合唱練習の成果を発表したあとミュージカル「獅子の笛」を熱演したが、可愛くて素晴らしい演技とあって観客を大いに楽しませた。

◇琵琶と尺八の饗宴

山崎町生涯学習センター学遊館と同町文化協会主催。山崎茶華道協会、平成会、山崎文化会館ホールサポートスタッフ協賛により、平成十四年十二月四日午後七時から同町東下野の学遊館研修室で開かれた。

同町戸原地区にお住まいの大藪旭晶さんによる琵琶の演奏。同町葛沢地区出身の大友竹邦さんによる尺八の演奏が行われた。お二人とも、その筋の超ベテランとあって、お見事な演奏。会場いっぱい聴衆約二百人を大いに感動させた。

編集後記

編集長 荒木俊介

「やまさき文化」第二十二号を発刊するにあたり、先ず初めに各団体より貴重な内容の原稿をお寄せ頂き、心より厚く御礼申し上げます。

この様な原稿を読んでもありますと、その内容の質の高さや又、それぞれの道を極めようとされる真摯な姿に感動し、ただただ敬服するばかりです。

私はよく他町で文化に関心のある人々から山崎町の文化水準の高さを

耳にすることがありますが、こうした原稿を読んでいると、あながちお世辞ばかりではないということがよく分かりますし、又同時にこの様な土壌を伝統あるものに育てあげて行きたいものだと思います。

さて、本号の特別寄稿には鴻ノ町出身で、神戸大学卒業後、日本有数の病院である東京虎の門病院に長年勤められ、現在消化器外科部長の沢田寿仁氏にお願いしました。氏は、NHKのテレビ番組にも出演される程のこの分野では日本でもトップレベルの権威ですが、しかし、故郷への思いとなると、矢張り人の子といった人間味が文面に溢れています。

この心情は、我々が郷者には味えないもので、室生犀星の詩にある様に「故郷は遠きにおいて思うもの」のようです。どうかこの気持を大切にご活躍あらんことをお祈り申し上げます。

挿絵とカットは、一二年間紙面を飾って頂いた福岡久藏氏にかわって緻密で清楚な画風の片山吉恵氏にお願いしました。ご期待下さい。

終りになりましたが、二年間お世話になった福岡久藏氏には心より厚く御礼申し上げます。

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店

カメウチ電装株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟郡山崎町今宿 98-15

TEL (0790) 62-1607(代)

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店



飛石機械産業からのお願い


人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社掲げて取り組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社 for happy day happy life
 TOBIISHI KIKAI SANGYO CO., LTD.
 〒670-0211 兵庫県宍粟郡山崎町山崎181-1 ☎(0790)62-1700
 飛石機械 dept
 飛石システム部
 〒670-0211 兵庫県宍粟郡山崎町山崎181-1 ☎(0790)62-1700
 飛石システム部
 〒670-0211 兵庫県宍粟郡山崎町山崎181-1 ☎(0790)62-1700
 飛石システム部
 〒670-0211 兵庫県宍粟郡山崎町山崎181-1 ☎(0790)62-1700
 CREATIVE dept

◆最新型カラー現像機導入◆
 カラープリント・スピード仕上げ
 良い品を・安く・安心して買える店



コーエーカメラ

Specialty Camera Shop

本 店 TEL (0790) 62-2089
 咲 店 TEL (0790) 63-0533

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3

料理旅館・割烹

創業 菊 水
 文久元年

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287
 TEL (0790) 62-1119(代)

寿 幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL(0790) 62-0052

あらゆる印刷の企画から製品まで

株式会社 支林館印刷所

宍粟郡山崎町山崎53
 TEL (0790) 62-1147(代)
 FAX (0790) 62-0081

用途に合わせて

にしん個人ローン

- 住宅ローン ●フリーローン
- マイカーローン ●カードローン
- 学資ローン

・豊かな老後生活のために
・資産の効率運用に

にしん個人年金保険

- 定額年金保険
- 変額年金保険



豊かな街づくりをお手伝いする

西兵庫信用金庫



<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>

本醸造 龍神 **しりた** 清酒 山陽 盃 確かな品質 純米酒 一献 **さつき**

ふるさとのお酒

サンヨウハイ

山陽盃酒造(株) TEL (0790) 62-1010(代)

※安全で快適な生活をお届けする※

JOMO 株式会社 ジャパンエナジー 特約店

ホンジヨウ

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790) 63-1234(代)
(0790) 62-4321(代)

創業明治28年・さつき本舗



四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 **あらき**

本店：播州山崎町さつき通り (電)62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電)62-0160



OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器



イトーオフィスサービス株式会社

代表取締役 伊藤和久

山崎町中広瀬117-12 TEL (0790) 62-0126